

MESA/BOOGIE

TRIAxis

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

MESA/Boogieのアンプを選択されたあなたは、とても賢明なプレーヤーであり、且つ、直感力に優れた方です。それと同時に、アンプ・メーカーとしての我々に、絶大なる信頼を頂いているという事ですね。我々は、その期待を重く受け止めています。このアンプを選択して購入されたという事は、このアンプがあなたの音楽を表現する体の一部になったという事であり、同時に、あなたはメサ・ファミリーの一員になったのです。メサ・ファミリーへようこそ!

我々の目指すゴールは、決してあなたを幻滅させる事はありません。偉大なアンプのオーナーになった今、メサの先人達が築き上げてきた様々な真空管アンプの伝統、そしてその上に新たに積み上げられた技術の全てを、あなたは享受出来るのです。これから、このアンプがあなたの音楽制作を触発し、多くの喜びを与えてくれる事は間違いありません。それは、これまで培ってきたあなたの奥底に眠る音楽に対する意欲や情熱を導き出す事であり、我々はその手助けが出来ればと願っています...私達の新たなる友へ捧げます。

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従ってインストールして下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発生する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意:安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意:必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogie (メサ/ブギー) アンプはプロ用の機材なので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

TRIAxis

目次

フロントパネル

プリセット / プログラム / パラメーターの編集	1-2
プリセットのマッピング	2
コピー機能とモードの選択	3
PROGRAM / CHANNEL ウィンドウ	3
MIDIチャンネルを変更する	4
データ・ダンプを受信する	4-5
ファクトリー・プリセットの停止/呼び出し	5

バックパネル

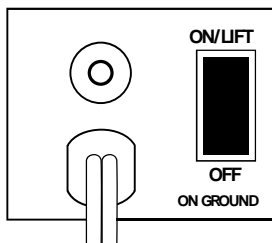
外部機器用電源	6
MIDI端子: IN / THRU / OUT	6
AC電源	1
外部スイッチング端子とレコード・アウト (録音端子)	6
メイン出力端子	7
エフェクト・ループ	7

操作

パラメーターの調整	8-12
モード	13-21
バージョン 2.0 コンティニューアス・コントロール・ソフトウェア	22-27
真空管機能表 / 仕様	28
接続例	29-36
出荷時の初期設定 (プリセット)	37-38
ユーザ設定テンプレート	39-42
パーツ・シート	43

TRIAxis

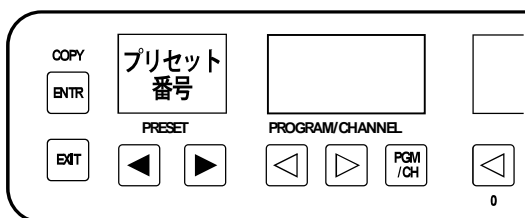
本体背面の電源をオンにする:



ノート: AC 電源スイッチには3つのポジションがあり、中央がオフになるタイプのスイッチです。まずはON/GROUND (スイッチを下)にして下さい。この時、音声にハム・ノイズが乗るようでしたら、ON/LIFT (スイッチを上)にして下さい。ACハム・ノイズやブーンというノイズが乗らない限りは、出来る限りON/GROUND にして下さい。

ノート: TriAxis のA.C.電源は、使用しているパワー・アンプと同じ系統の電源から取る様にして下さい。使用するエフェクト機器の電源も同じ系統から取って下さい。システム内の機器の電源を共通の系統から取る事で、音質の劣化を防止する事が出来ます。この手順を無視すると、音質のキャラクターに明らかな違いが現れます。

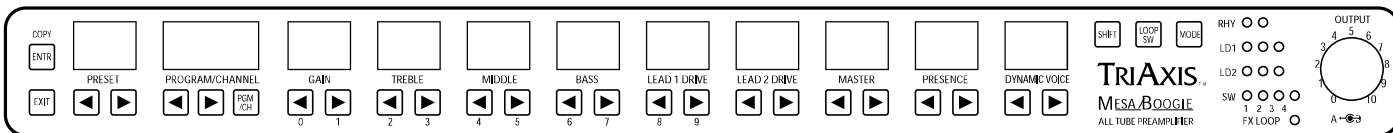
ファクトリー・プリセット1-10を一通り聴いてみる:



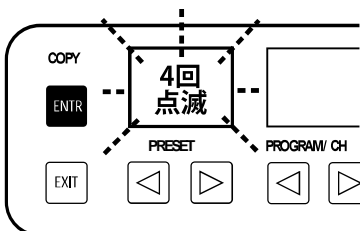
プリセット・キー ◀ ▶ を使用します。(メサのスイッチ・トラック機能を持ったパワー・アンプに、TriAxis のスイッチ1ジャックを接続した状態でないと、11-20は、殆ど違いが解らないでしょう)

ノート: ファクトリー・プリセット1 から 20は、電源を入れると自動的にロードされます。手動で他のデータをロードしたい場合は、4 ページに記載されている手順に従って下さい。

値を増減する: プリセット、プログラム、パラメーター、それぞれの矢印キーを使用します。

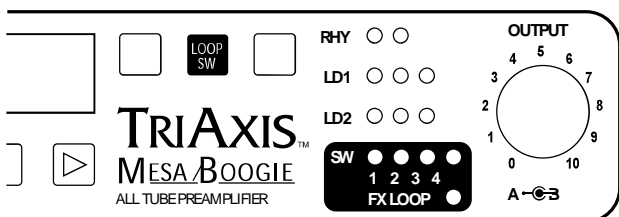


パラメーターを変更して保存する:



プリセットの設定を変更して保存するには、ENTRキー ◻ を2回押します。まず1回押すとプリセット・ナンバーが点滅し、その番号に上書きされる事を示します。ここでもう1回ENTRキー ◻ を押すと保存が実行されます。点滅している時にもう少し変更したくなったり、オリジナルのプリセットを聴きたくなったら、EXIT キー ◻ を押します。そうすると、それまで行った変更が無効になって、オリジナルの設定に戻ります。

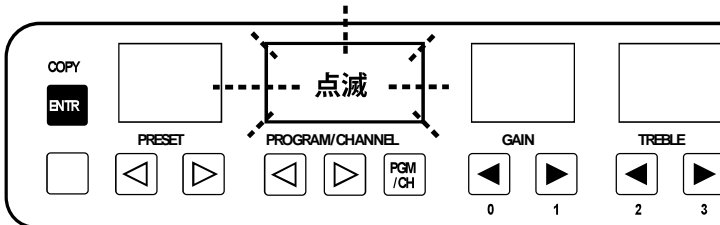
プログラム可能なFX LOOPとファンクション・スイッチを有効にする:



LOOP SWキー ◻ を押します。これにより、ループ/スイッチ・コンビネーションが可能になります。必要なコンビネーションを選択して、それを保存するには、ENTRキー ◻ を2回押します。

フロントパネル(続き):

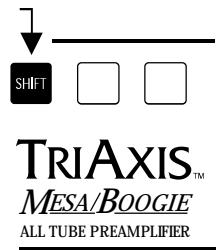
プログラムにアクセスする(数値キー経由):



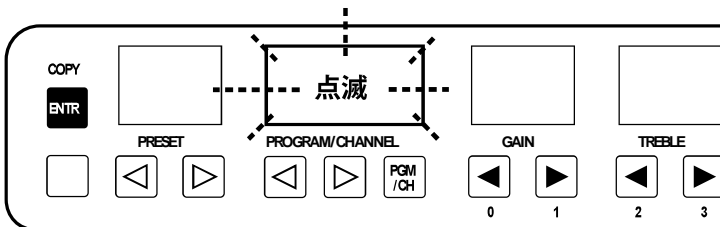
1. SHIFTキー [SHIFT] を1回押してプログラム・モードに入る。

2. GAIN、TREBLE、MIDDLE、BASS、LEAD DRIVEウィンドウの下にある数値キーでプログラムを選択する。

3. ENTRキー [ENTR] を1回押して、選択した番号のプログラムを呼び出し、そのプログラムの音を聴きます。



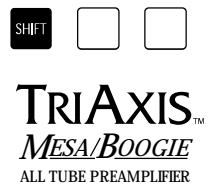
プリセットにアクセスする(数値キー経由):



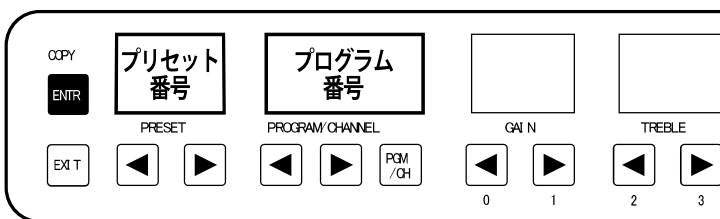
1. SHIFTキー [SHIFT] を2回押してプリセット・モードに入り、数値キーでプリセットを選択する。

2. プリセットが点滅している状態で、ENTRキー [ENTR] を1回押してそのプリセットを聴く。

3. ENTRキー [ENTR] を2回押して、点滅表示しているプリセット・ナンバーを、表示されているプログラム・ナンバーに保存します。



プリセットをプログラムにマッピングする:



まず最初に、プリセットは“サウンド”でプログラムは“MIDIプログラムの場所”である事を理解して下さい。

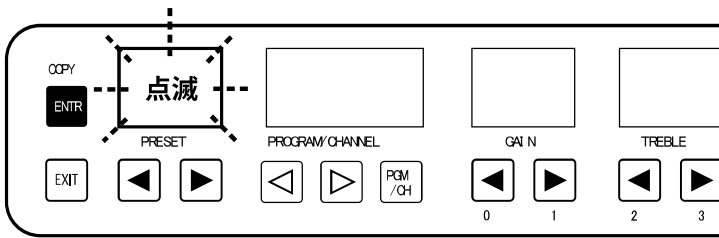
1. PROGRAM / CHANNELウィンドウの下にある矢印キー [◀ ▶]、あるいはMIDIコントローラー、もしくはGAIN、TREBLE、MIDDLE、BASS、LEAD DRIVEウィンドウの下にある数値キーで、保存したいプログラム・ナンバーを呼び出す。

2. 欲しいプリセット“サウンド”のナンバーを、PRESETウィンドウの下にある矢印キー [◀ ▶] で選択する。これで、PRESETウィンドウに欲しいサウンドのプリセット・ナンバーが表示され、PROGRAM / CHANNELウィンドウにそのサウンドを保存したいプログラム・ナンバーが表示されます。

3. ENTRキー [ENTR] を2回押すと、保存が完了します。

コピー機能:

プリセットを他のプリセット・ナンバーにコピーする:



1. コピーしたいプリセットを選択する。

2. SHIFTキー を押してから ENTRキー を押します。これで“元の”プリセット・ナンバーが4回点滅します。



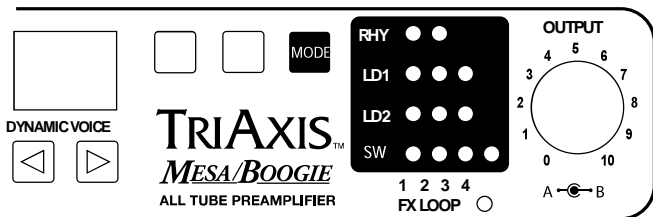
3. GAINからLEAD DRIVEウィンドウの下にある数値キーで、“行き先の”プリセット・ナンバーを選択します。

4. ENTRキー を1回押します。行き先のプリセット・ナンバーが点滅して、行き先のプリセット・ナンバーのパラメーターが、“元の”プリセット・ナンバーのパラメーターに入れ替わった事を示しています。(このコピーを中止して、行き先のプリセットに上書きするのをやめたい場合は、EXITキー を押して“元の”プリセットに戻して下さい。)

5. コピーの手順を完了するには、ENTRキー をもう1回押します。“元の”プリセット・ナンバーが行き先のプリセット・ナンバーにコピーされ、PRESETディスプレイに“元の”プリセット・ナンバーが表示されます。元のプリセットと行き先のプリセットのパラメータを比較して、正常にコピーされた事を確認して下さい。

モードの選択:

8つのモードがあり、MODEキー を押すたびに新しいモードに切り替わります。



ノート: MODEキー では設定は変化しませんので、サウンドがちょっとおかしい、あるいは音が出ない場合は、モード/パラメーターの設定をチェックしてみてください。

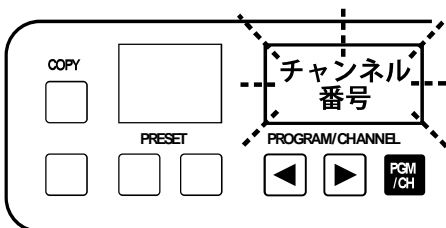
モードは次の8つで構成されています:

Rhy - 緑 = ビンテージ・ファット・リズム
 Rhy - 黄 = モダン・ブライツ・リズム
 Lead 1 - 緑 = ビンテージ Mark 1 リード
 Lead 1 - 黄 = ゲイン・ブースト MK I リード

Lead 1 - 赤 = デュアル・レクティフィア・ビンテージ・チャンネル
 Lead 2 - 緑 = ミッド・ゲイン MK IV リード
 Lead 2 - 黄 = クラシック MK II リード (MK II-V)
 Lead 2 - 赤 = サーリング MK III リード

(各モードの詳細については、このマニュアルのモード・セクションをご覧ください)

PROGRAM / CHANNEL EL ウィンドウ:






このウィンドウには、現在のMIDIプログラム・ナンバーやMIDIチャンネルが表示されます。

ノート: プリセット・ナンバーとMIDIプログラム・ナンバーを混同しない様にして下さい。プリセット・ナンバーは作成された(あるいは工場出荷時の)ナンバーであり、MIDIプログラム・ナンバーは、それをアサインした番号です。言い方を変えると;プリセットはサウンドであり、プログラムは保存場所です。

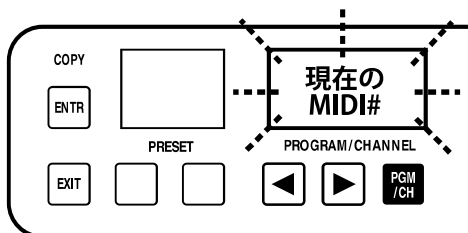
フロントパネル(続き):

PROGRAM / CHANNELウィンドウ(続き):




ノート: 電源を入れるとPROGRAM / CHANNELウィンドウには、電源を切る前に使用していたMIDIプログラム・ナンバーが表示されます。TriAxisがプログラム・チェンジを受信する様に設定する為に、現在のMIDIチャンネルを確認します。このウィンドウを下にあるPGM / CHキー  を押します。ウィンドウには現在のMIDIチャンネルが表示され、チャンネルの番号が点滅します。MIDIプログラム・ナンバーに戻るには、PGM / CHキー  を押します。

注意: MIDIチャンネルはPGM / CHキー  を押さない限り、表示される事はありません。

MIDIチャンネルを変更する:



PGM / CHキー  を押します。PROGRAMウィンドウに、現在のMIDIチャンネルの番号が表示されて点滅します。

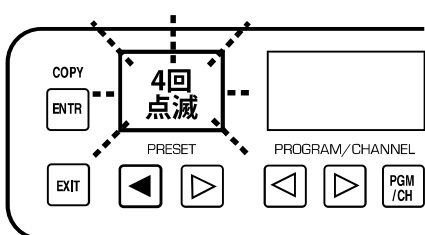
矢印キー   を使用して、チャンネル番号を変更します。選択した番号を決定するには、PGM / CHキー  をもう一度押します。するとウィンドウは、プログラム・ナンバーの表示に戻ります。

MIDIシステム・エクスクルーシブ・データ・ダンプ機能:


プリセットとプログラムのコンビネーションや、ループ/スイッチの設定を含む、メモリーに保存されている全ての情報を、外部記憶メディアやパソコン、そして他のシステム等に、MIDIポートを介して保存しておく事が出来ます。この時の記録媒体は、ハードディスクやフロッピーディスク等が挙げられます。これらの保存したデータは、本体に戻す事も出来ますので、バックアップ、もしくはTriAxisの拡張メモリーと捉える事も可能です。

ノート: TriAxisのシステム・エクスクルーシブ・データの製造者IDは、00004Aです。パソコンでファイルのリストを作成するような時にはこれが役に立ちますが、殆どの場合、この番号を意識する必要はありません。

データ・ダンプを受信する:

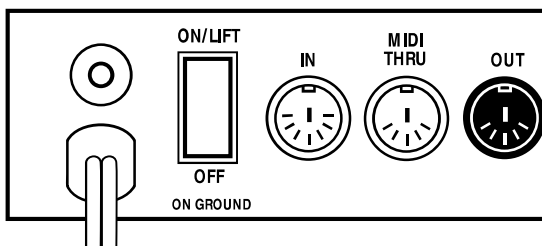


1. TriAxisのMIDI OUT端子に5-ピンのDINケーブルを接続する。保存メディアのMIDI IN端子にケーブルの反対端子を接続して、次の手順に従って作業を行う。

2. TriAxisのSHIFTキー  を押して、PRESETの左矢印キーを押すと、PRESETウィンドウが4回点滅して、“ダンプ”が完了した事を示します。



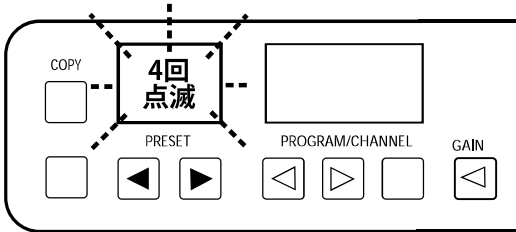
TRIAxis™
MESA/BOOGIE
ALL TUBE PREAMPLIFIER



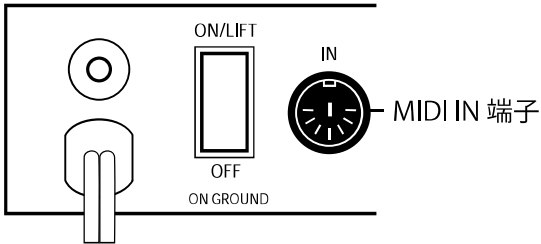
ノート: ダンプ先の機器のスクリーンにI.D. ナンバーが表示され、“ダンプ完了”といったメッセージが表示されます。TriAxisのメモリー自体には何の影響を与える事も無く、この行程は僅か0.5秒という短時間で完了します。この機能を使用する事で、工場出荷時のプリセット・データをバックアップしておく事も可能です。

フロントパネル(続き):

受信(ロード):



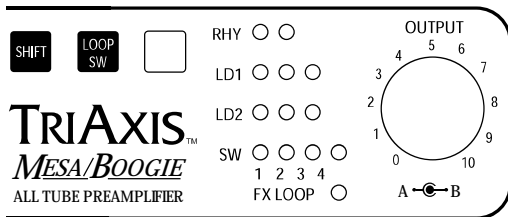
バックパネル



保存しておいたサウンド・データをTriAxisにロードする手順も、とてもシンプルです!

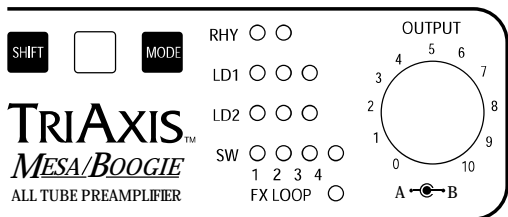
1. データを保存しているメディアのMIDI OUT端子と、TriAxisのMIDI IN端子を接続する。
2. 保存メディア側で正しいデータ(ファイル)を送信出来る様に設定する。
3. この作業を行うと、現在TriAxisのメモリーにあるデータが消去されるので、TriAxisのプリセット・データが“バックアップ”されている事を確認する。
4. 保存メディア側で転送、あるいは送信を実行すると、TriAxisにそのデータがロードされます。データが転送されると、PRESET ウィンドウが4回点滅します。

ファクトリー・プリセット 01 -20の停止/呼び出し:



プリセットの21 - 90がいっぱいになって、プリセットの01-20にオリジナルのプログラムを保存している場合、そのまま電源を入れ直すと、プリセットの01-20にはファクトリー・プリセットがロードされてしまいます。次の手順で、それを停止させる事が出来ます。

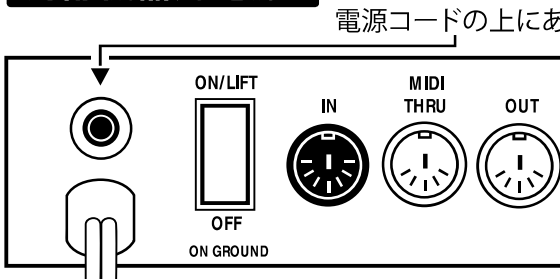
1. 停止: SHIFT キー **[SHIFT]** を1回押してからLOOP SWキー **[LOOP SW]** を押します。これにより、電源オン時に自動的にファクトリー・プリセットをロードするのを停止させ、オリジナルのパラメーター設定になります。この手順で機能を停止させないと、プリセットの01-20には、ファクトリー・プリセットがロードされてしまいます。



2. 呼び出し: ファクトリー・プリセットを呼び出すには、SHIFT キー **[SHIFT]** を1回押してからMODEキー **[MODE]** を押します。このコマンドを実行すると、プリセットの01-20が全て上書きされてしまいますので、このプログラム・エリアの必要なプリセット・データは、予めバックアップを取っておいて下さい。

バックパネル:

外部機器用電源:



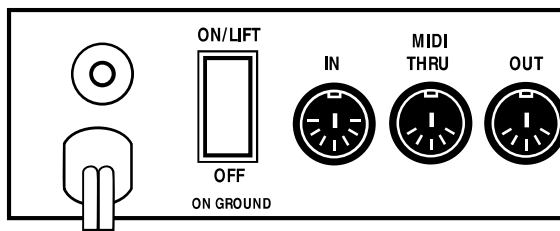
電源コードの上にある、コアキシャルの電源端子と、7ピンのMIDI IN端子を介して、MIDIフットコントローラーに電源を供給します。これにより、外部交流電源を直流電源に変換する事が出来ます。コアキシャル端子の極性と電圧が合っている製品であれば、この端子で電源を供給する事が可能になります。

メサ・ブギーのAbucusフット・コントローラーは、12ボルト、500 ma チップ (内側) = グランド、スリーブ (外側) = プラスです。

7ピンのDINケーブルで、TriAxisのMIDI IN端子とフット・コントローラーのMIDI OUT端子を接続します。これにより、ステージ上で邪魔なアダプターが必要なくなります。

ノート: 7ピンのDINケーブルは、5ピンのDIN端子に接続する事は出来ません。お使いのフット・コントローラーが7ピンのDIN端子を装備しているかどうかを確認して下さい。装備していたら、電圧と極性を確認して、先程の手順で接続して下さい。

MIDI IN、THRU、OUT 端子:

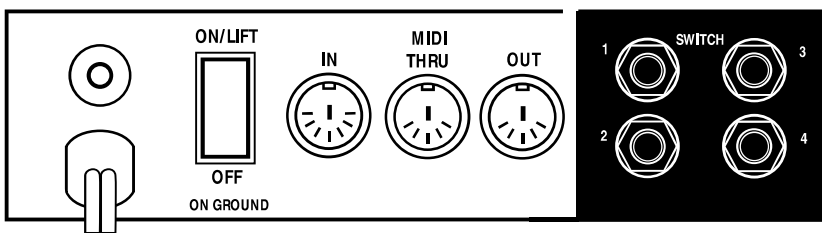


TriAxisは、標準の“MIDIインターフェース”を搭載しています。7ピンのDINケーブルでAbacusやそれに類するフット・コントローラーに接続する事が出来ます。TriAxisのMIDI THRU 端子は、他の機器のMIDI INと接続します。

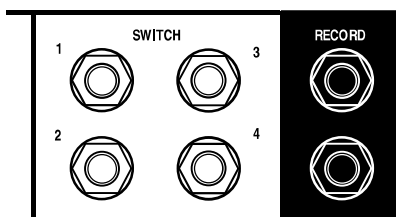
TriAxisのMIDI“THRU”とMIDI OUT 端子には、MIDI INから入力された情報が出力されます。“THRU”端子からは、データ・ダンプ等の本体内の情報は出力されません。本体内の情報を出力する際は、MIDI“OUT”を使用して下さい。TriAxisのフロント・パネルでプログラムを変更すると、“OUT”からMIDIプログラム・チェンジ・メッセージが出力されます。

SWITCH (スイッチ) 端子:

スイッチ端子 1～4 には、“チップ・トゥー・グランド”タイプのスイッチを接続して、外部機器をコントロールします。メサ・ブギーの製品であれば、スイッチ・トラック機能の付いたパワー・アンプ・シリーズの“スイッチ・トラック”ボイシング機能をコントロール出来ます。メサ以外の製品でも、ラッチ・タイプのスイッチを使用出来る製品であれば、全てではありませんが、バイパス、ホールド、ミュートといった多くの機能をコントロール可能です。使用している機器をコントロール出来なかったら、その製品に必要な電圧と、“グランド”が必要かどうかを、その製品の製造メーカーに問い合わせてみて下さい。



RECORD (録音) 端子:

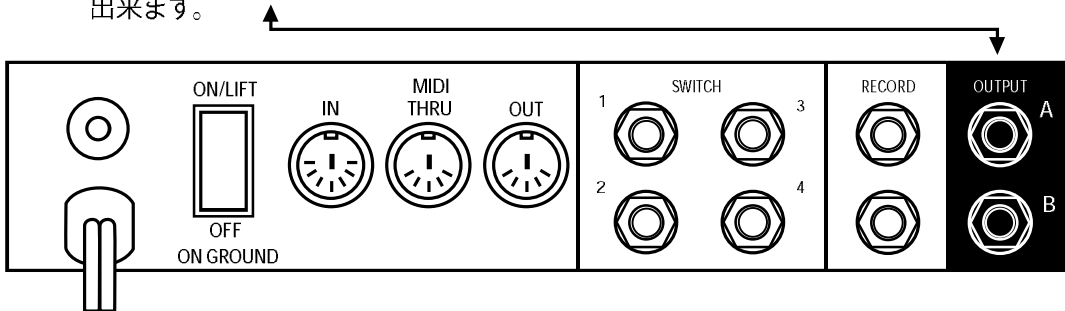


この端子は、レコーディング・コンソールやライブ・ミキサーにステレオで接続します。この端子からは、あなたが使い慣れているパワー・アンプやスピーカーと同じ様に、リードやリズム・サウンドを出力する事が出来ます。出力レベルは、フロント・パネルのプログラム可能なMASTERコントロールで設定します。極端な設定にすると、コンソールの入力回路でオーバーロードしてしまう可能性がありますので、注意が必要です。マスターは中位の設定にすると、殆どの場合最適なレベルになります。出来るだけのように心がけて下さい。

バックパネル(続き):

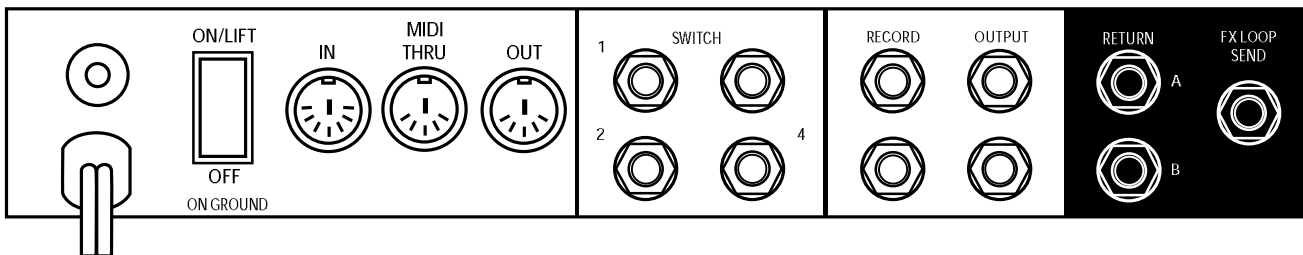
OUTPUT(出力端子):

これら A/Bジャックは左右2つの出力になっており、パワー・アンプやエフェクト・プロセッサに直接接続する事が出来ます。

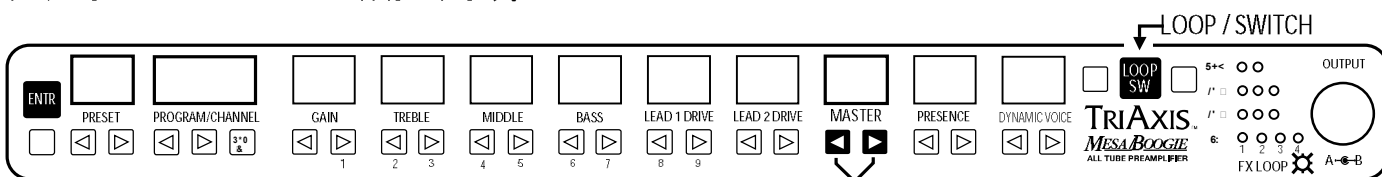


FX LOOP(エフェクト・ループ):

これらのジャックは、モノ・センドとステレオ・リターンで、エフェクト・ループを構成しています。エフェクト・ループは、フロント・パネル(下図)のLOOP/SWITCHとENTERキーで、プリセット毎にプログラムする事が出来ます。エフェクト・センド・レベルは、フロント・パネルのプログラム可能なMASTERコントロールで設定します。



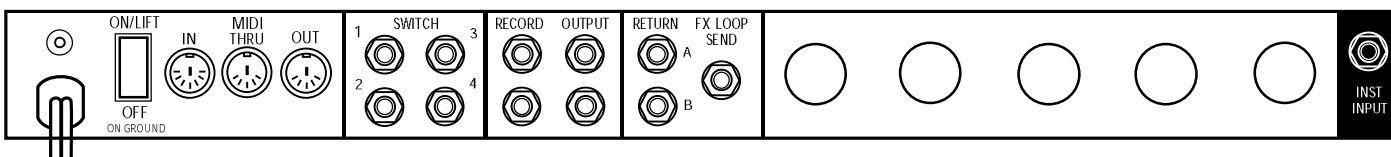
LOOP SWキーを押して、エフェクト・ループのコンビネーションと、PRESET/PROGRAM コンビネーションの機能を切り替えます。ENTERキーを2回押して、このコンビネーションを書き込みます。これでエフェクト・ループのコンビネーションが、表示されているPRESET PROGRAMに保存されます。



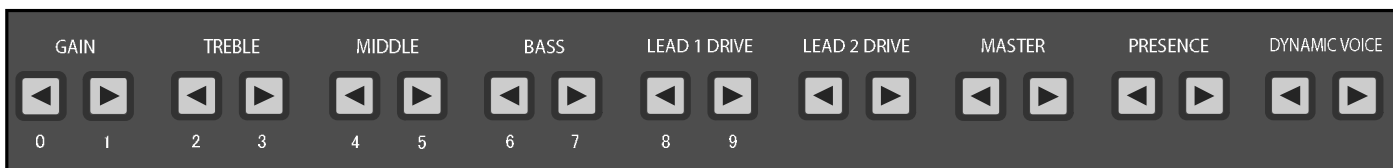
プログラム可能なマスター・ボリューム:
エフェクト・センド・レベルのコントローラーとしても動作します

INSTRUMENT INPUT(楽器入力):

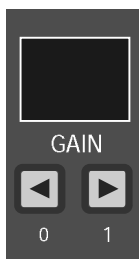
このバックパネルの右端にある端子には、楽器の出力を接続します。



コントローラー:



GAIN (ゲイン):



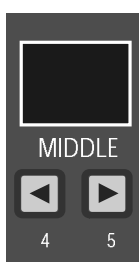
これは、TriAxisの最も決定的で強力なコントローラーです。そして、全体のゲイン量や、各モードの形成や感度だけでなく...トーン・コントロールにも多大な影響を与えます。一般的には、ここでの設定が、モードの最終的な個性を決定します。この設定を低めにすると、特に高音域に於いて、とてもダイナミックなレスポンスを持った“クリーン”で明るいサウンドになります。反対にこの設定を高めにすると、モードの個性は太くてオーバードライブの掛かったものになります。TriAxisでは、ゲインはどの領域も使い易く、またとても音楽的です。このシンプルなレイアウトを見て、ゲインでのコントロールには限界があるのではないかと不安になるかもしれませんが、その心配はいりません。ゲインの周波数設定も領域の設定も、相当な時間を掛けていますので、極めて精度の高いものになっています。素晴らしいサウンドのほとんどは、特に6つのリード・モードに於いては、ゲイン・コントロールをほど良く設定した時に得られます。例えば、リード・モードでは、【2.0】から【8.0】の間、リズム・モードでは、【3.0】から【8.0】の間といった具合です。この範囲に設定する事で、ボリュームやエフェクト・センド・レベルとのバランスを取る事が優しくなりますし、厄介な真空管のマイクロフォニックを起こしにくくなります。

TREBLE (トレブル):



ほとんどの真空管ギター・アンプに於いて、トレブル・コントロールは、3つのトーン・コントロールの中で最も強力と言えるでしょう。TriAxisでは、ミッドとバスでコントロール出来る量を、トレブル・コントロールが決めてしまいます。この設定を高めにすると、トレブルが優先されてしまいますので、ミッドとバスは最小限のコントロールしか出来なくなってしまいます。この設定を低めにすると、トレブルが控えめになりますので、暖かく暗いサウンドになります。このパラメーターを微妙に調整する事で、良い結果を得る事が出来ます。

MIDDLE (ミッド):



ミッド・コントロールは、ゲインを低めに設定したサウンドに於いて、中音域のパンチと太さを決定し、ゲインを高めに設定したサウンドに於いては、滑らかな“ボーカル”っぽさをブレンドします。また、設定によっては、“ある周波数帯域をカットする”様に動作させる事も出来ます。この設定は、トレブル・コントロールの影響を大きく受ける事を忘れないで下さい。しかし...例外もあります...リード1赤モードでは、ミッド・コントロールが強力に作用します。その影響力は、他のモードに於けるトレブル・コントロールに匹敵します。ミッド・コントロールはその設定が低くても高くても、トーン・コントロール前のゲインで形成された個性を、完全に作り変えてしまう事が出来ます。この違いは、他の7つのモードに於いては、ミッド・コントロールのカーブ特性が標準的で、回路の位置が同じであるのに対し、リード1赤モードでは、カーブ特性が劇的に変化し、回路の位置も異なる事によります。

このモードでミッド・コントロールをととても低く設定すると、アタックが弱く柔らかいキャラクターのサウンドになります。このタイプの設定は、単音のソロ・サウンドや、とても低いゲインのリズム・サウンドに向いています。リード1赤モードでミッド・コントロールの設定を低くすると、弦を弾く感覚が軽く感じられます。リード1赤モードでミッド・コントロールの設定を高くすると、強いアタックと攻撃的な感覚が加わります。この領域の設定にしていると、GAINとLEAD DRIVEの設定は、明瞭度を失わない程度までなら、比較的高くする事が出来ます。

コントローラー (続き):

MIDDLE (ミッド、続き):

このタイプのミッドの設定は、バス・コントロールをかなり高めに設定しても、ボトム・エンドをタイトに保つ事が出来ます。ミッド・コントロールを高めに設定すると、倍音が“増大”し“にぎやか”にはなりますが、“音程感”を保つ事が出来ます。簡単に言うと、リード1 赤モードでトーンを形作るのは、ミッド・コントロールによる所が大きいという事です。

BASS (バス):



このコントロールでは低音域を調整しますが、ミッド同様、トレブル・コントロールの影響を受けます。この設定は、低過ぎても高過ぎてもトーンのバランスを崩してしまいますので、適度にする事が重要です。リード1 赤モードを除く全てのモードでは、ゲインを高くし過ぎない様に注意して下さい。バスを多くし過ぎると、締まりの無いぼけたサウンドになってしまいます。そして一旦そうなってしまうと、それを他のトーン・コントロールで解消する事は出来ません。それは、バスがトーン・コントロール回路の最初に位置しているからです。リズム・モードでクリーン・サウンドにする為には、バス・コントロールの値を【4.0】から【5.0】にして下さい。またリズム・モードでハイ・ゲインのオーバードライブ・サウンドにする為には、【3.0】以下に設定して下さい。リード・モードでは、ゲインやトレブルの設定に応じて、バスの設定は【3.0】から【6.0】にして下さい。リード1 赤モードだけは他の7つのモードと違って特殊なので、バス・コントロールを【5.5】から【10】という高い値に設定する事が出来ます。その理由については、このマニュアルのモード・セクションの“リード1 赤モード”をご覧ください。

LEAD 1 DRIVE (リード1ドライブ):



これは、リード1グループ回路の主要なゲイン・コントロールです。3つのリード・モードの、最も重要なプリ・アンプ真空管ステージの、オーバードライブ量を、このコントローラーで決定します。このマニュアルのモード・セクションの最初の方(リード1 赤モードをご覧ください)で述べました様に、トーン・コントロール回路の前段に於ける、このコントロールの位置が異なります。緑と黄モードに於いて、リード1ドライブは、最初の真空管ステージに重大な影響を与えます。この設定を高くすると、それにより生み出された豊かで暖かみのあるゲインが、“隙間を埋めて”倍音が含まれる様になります。リード1ドライブとゲイン(フロント・パネルの左端)の設定のマッチングによって、良いサウンドが決まってしまう。傾向として、リード1ドライブをゲイン以下に設定すると良いようです...例えばゲインが【8.0】でドライブが【8.0】、あるいはゲインが【8.0】でドライブが【6.0】という様に。この傾向を知っておくと、輪郭のしっかりしたバランスのとれたサウンドを作るのに役立ちます。

赤モードでは、リード1ドライブ・コントロールが後ろのステージに移動しますので、さらに効果が増します。これは大変重要な事なので、ここでもう一度触れておきます。リード1 赤モードの操作の中でゲイン・コントロールは最も重要です。前にも触れた様に(モード・セクションのリード1 赤モードをご覧ください)、このコントロールの回路上の位置は通常、トーン・コントロール回路の前にありますが、TriAxisでは、それを調整する事が出来ます。このゲイン・コントロールを適正な“固定値”にする事はとても重要です...少なくとも推奨値から外れない設定になっている事を確認して下さい。ゲイン・コントロールを【6.0】に設定して、リード1ドライブがその値に達していない場合は、ゲインの数値を大きくする前に、リード1ドライブの値を大きくします。こうする事で、ボトム・エンドをタイトに保ちながら、高音域もうるさくない様にする事が出来ます。

LEAD 2 DRIVE (リード2ドライブ):



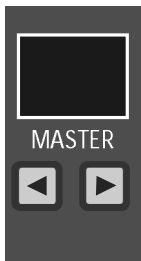
リード2グループのモードは、そのコントローラーがトーン・コントロールの後ろに位置しています。その為、オーバードライブの調整を回路の後半で行いますので、ゲインの微調整に集中する事が出来ます。このドライブ・コントロールは、リード2グループ回路の3番目のステージでゲインをコントロールします。そのカーブ特性は、【0.0】から【3.5】までの低い領域で微調整が出来る様になっています。【4.0】から【7.5】では少しカーブが急になり、【8.0】から【10】ではさらに大きく変化します。TriAxisのコントローラーの多くは、適度な設定にすると良い結果が得られます。このコントローラーは、ゲイン・コントロールとの関連が重要です。激しいロック・サウンドが欲しい場合は、通常リード2ドライブを【8.0】以上に設定する必要があります。このコントローラーの適度な設定が解ってきたら...システムの他の部分、例えば、ギターのパックアップ、スピーカー、パワー・アンプ等に目を向けていきましょう。言葉をかえれば...ゲインを十分以上の設定にしてしまうと、最も究極的なスタイルでさえも許容出来なくなってしまいます。

コントローラー (続き):

LEAD 2 DRIVE (リード2ドライブ、続き):

ゲインとリード2ドライブの2つのコントローラーは、互いに関連し合っただけで独特のサウンドを生み出します。一般的にゲインを高くすると...重く、太くなってサウンドの飽和が起こり、リード2ドライブを高くすると...明るく、倍音の多い攻撃的なキャラクターになります。ブルーなメディウム・ゲイン・ソロ・サウンドは、ゲイン設定を【7.0】から【7.5】に、もっと激しいロック・サウンドは、【8.0】に設定して下さい。後は音を聞きながら、リード2ドライブを調整するだけです。カッコいいサウンドの多くは、リード2ドライブをゲインの値以下にする事で得られます。とりわけリード2ドライブの低い領域は、ディストーションの掛かり始めが信じられない程スムーズです。ファクトリー・プリセットを参考にする事でコツが解ってきます...後は経験です。

MASTER (マスター):



プログラム可能なマスター・コントロールは、TriAxisのレイアウトで3つの目的があります。最初に: 8つのモードそれぞれの、レベル・バランスのコントロール。これのおかげで、音作りの一部であるゲイン・コントロールと、音量調整を分ける事が出来、また、他のモードとの相対的な音量バランスを整える事が出来ます。2つ目に: 各モードのエフェクト・ループのエフェクト・センド・レベルをコントロール出来ます。TriAxisの多くのコントローラー同様に、このコントローラーも、中位の領域でコントロールすると、良い結果が得られます。

3つ目に: マスターは、レコーディング端子への出力レベルになります。リア・パネルのレコーディング出力は、直接ミキシング・ボードやレコーダーに接続出来ます。このコントロールは、レコーディング出力端子から出力される信号レベルを決定します。この使い方をする時は、マスター・コントロールを【0.0】から少しずつ大きくしていきます。これにより、スピーカーや耳への損傷を与える可能性を最小限にする事が出来ます。また、コンソールの入力ヘッドルームの感度を調整する時にも役立ちます。クリーン・リズム・モード(緑/黄)では、プログラム可能なマスターを【6.0】以上にしないで下さい。これ以上にすると、ダイナミック・ボイス・コントロールの入力段でオーバーロードしてしまい、不必要なクリップを起こす可能性があります。

PRESENCE (プレゼンス):



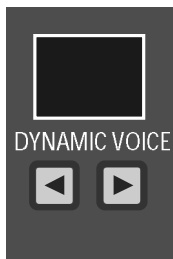
このコントローラーは、明るさとアンプのパワー・セクションのネガティブ・フィードバックを制御します。TriAxisには、伝統的な回路への新しいアプローチが採用されています。ダイナミックなフィードバック・ループは、高域とトレブルの周波数の高い方を圧縮する新しい機能を、プレゼンス・コントロールに与えています。このユニークな(高域を圧縮する)回路に特許技術を採用し、この同じ基本コンセプトを、ギター真空管アンプの多くのパーツにも適用しています。またこの技術は、TriAxisに最初に寄与する事になります。それでは、この特許技術について詳しく見ていく事にしましょう。

プレゼンス・コントロールの値を大きくすると、高音域がより強調されます。そして入力される信号のレベルが小さいと高音域が強調されます。反対に、プレゼンス・コントロールの値を小さくすると、高い倍音が抑制されます。また入力される信号のレベルが大きいとサウンドは暗くなります。ですから...プレゼンス・コントロールの値を大きくして弱くピッキングすると(プレゼンス・コントロールには弱い信号が入力されるので)、出力されるサウンドは高音が目立ちます。ここでプレゼンス・コントロールの値を小さくしてピッキングを強くすると、高い倍音が抑制されます。言い方を変えると、プレゼンス・コントロールは、本来の演奏に応じた音質の変わり方と反対に働くので、演奏がよりダイナミックになるという事です! 多くのプレイヤーは、微妙なニュアンスを表現出来る真空管回路を望んでいるはずですが...このプレゼンス・コントロールは、その方向に大きく踏み出したと言えます。トレブルの音域で強いピッキングのソロ演奏をしても...TriAxisはあなたの思い通り!強いピッキングをしても、プレゼンス・コントロールを低めに設定すれば、サウンドは丸く、圧縮が掛かるのです。

さらに、低音域の演奏をしていてプレゼンス・コントロールを高めに設定すると...リラックスした演奏にも関わらず、プレゼンス・コントロールがエッジを加えてくれます。殆どのプレイヤーは、高音域は太く、低音域は明瞭にと望んでいます。この相反する希望に応える事は出来るのでしょうか? 答えはイエスです。TriAxisに接続して、プレゼンス・コントロールを使えば良いのです。特に、ソロ演奏に於ける効果は絶大です。

コントローラー(続き):

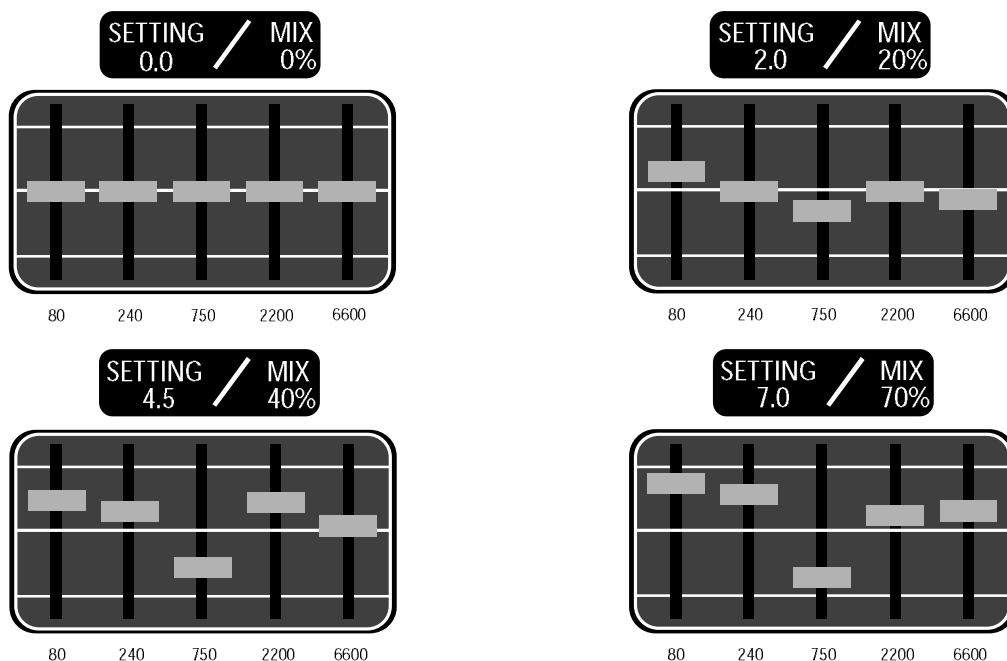
DYNAMIC VOICE (ダイナミック・ボイス):



この革新的な回路により、TriAxisは、パワーと、殆どのブギー・コンボあるいはブギー・ヘッドに搭載されている5バンド・グラフィック・イコライザーを同時に手に入れる事になります。しかしこの製品には、グラフィック・イコライザーにある、5つのスライダーを装備するスペースはもちろんありません...そこで、私達はいくつかのEQカーブを用意して、それをパラメータで選択する事にしました。右矢印キーの増加と左矢印キーの減少を使用して、予め設定されたEQカーブを選択するのです!また、TriAxisのこの機能は、EQの掛かっていない“ドライ”信号と、EQの掛かった音をミックスします。ですから、通常のグラフィック・イコライザーと異なり、出力される信号はEQの回路を通った音だけではありません...ダイナミック・ボイス回路にはEQとミキサー機能が内蔵されているのです!ダイナミック・ボイスの値を大きくすると、“ドライ/ウェット”のバランスがウェットになっていきます。この値が1.0から4.0の時は、EQが掛かった音は少しになり、この値を大きくすると、EQ掛かった音が多くなり、この値を10にすると、EQの音のみになります。

このミキシング・バランスの変化と同時に、EQ“カーブ”も変化しています。ダイナミック・ボイスはプリセット・カーブを使用しますが、そのカーブはR&D部門が長い時間を掛けて設定したものと、多くのブギー・ユーザーに評判の良い設定の中から吟味して選択しています。そのカーブがどのような特性かと言いますと、値が0.0の時はドライ音のみですのでフラットです。この値を10にすると出力される音は、EQの掛かった音のみになり、カーブ特性は、ロー・エンドがブーストされ、中音域はカットされ、そこから高音域にいくに従ってブーストされていきます。このカーブ特性は、ハイ・ゲイン・サウンドやメタル・サウンドに向いています。0.0から10の間の設定では、カーブもミックス・バランスも、あらゆるタイプのサウンドに対応しています。設定をいくつかの領域に分けて、それぞれに向けたサウンドをご紹介します: クリーン・サウンド (通常はダイナミック・ボイスが無くても良いでしょう) は、この設定を1.0から2.0にします。リード・サウンドは設定を高めめの3.0から7.0位にすると良いでしょう。中でも6.5から7.0にすると、相当激しくなります。ここまで高い設定にすると、ダイナミック・ボイス機能を使用していない他のモードのサウンドとの音量バランスが大きく異なってしまいますので、マスター・コントロールでレベルを下げる必要があるかもしれません。

ダイナミック・ボイスは、特にリード2・モードのサウンドを補完する為に設計された機能でもあります。この回路は、リード2のように、トーン・コントロールの後ろにある回路に効果的です。既に述べた様に、これらのモードでは、バス・コントロールがプリ・アンプの初期段階で掛かる為に、バスの値をあまり大きくする事が出来ません。そのため、低音域が弱くなってしまうがちです。そこで、このダイナミック・ボイスを使用して低音域を上げる事で、それを補う事が出来るのです。この時、高音域も多少加えられますので、タイトさや鋭いアタックが失われる事はありません。

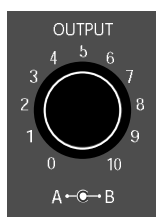


コントローラー (続き):

DYNAMIC VOICE (ダイナミック・ボイス、続き):

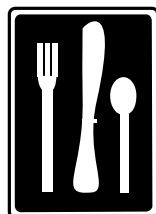
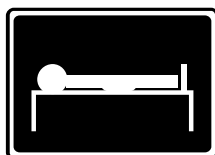
ダイナミック・ボイスによるブーストは、これら3つのモードでは、回路の後半で行われますので、最も効果的であり、タイトなアタックに与える悪影響はとて少なくなっています。しかしこのダイナミック・ボイス機能は、TriAxisの8つのモード全てに向いているわけではありません。ダイナミック・ボイス機能の特徴を良く理解して、良い結果が得られる場合にのみ、効果的に使用する様にして下さい。

OUTPUT (アウトプット):



このノブは、TriAxisの最終的な出力レベルを決定するコントローラーです。プログラム可能なマスター・コントロールで、8つのモード間の相対的なバランスをとった後の、出力ボリュームをコントロールします。また、このコントローラーは、エフェクト・リターン・レベルもコントロールします。そのおかげで、セットアップがシンプルになり、お好みのエフェクト・プロセッサーを使用するのに、操作するつまみが1つ減る事になります。最適な設定は、部屋の大きさにもよりますが、パワー・アンプの入力設定と、どのくらいの音量にしたいかで決まります。基本的には【3.0】から【7.0】の間 ...後は微調整です。

休息場



モード:

TriAxisは膨大な要素で構成されていますが、極めてシンプルです。それは8つのプリ・アンプ、もしくはモードからなっており、大きく3つのグループに分ける事が出来ます。そのグループとは、リズム、リード1、リード2の3つです。これらのグループはそれぞれ、似たような回路の構成、パーツ、そしてプリ・アンプ管で構成されています。しかし各モードは、独特で、真空管という伝統的で個性的な“骨格”を持っています。私達はそれらを解り易くする為に、いくつかのグループに分けています。TriAxisを初めて使用する時、殆どのプレーヤーはリズム・モードの1つ、そしてリード・モードの1つに引き寄せられます。通常この好みというのは、そのプレーヤーが今まで使ってきたアンプのタイプによって別れるようです。長年のブギー・ユーザーであれば、Mark I、II、III、IVのどれかを使用していたでしょうし、であれば両者のリズム・モードは良く似ていますので、違和感無く使えるでしょう。また、リード2の緑や黄モードのサウンドの虜になってしまうかもしれません。このマニュアルを読んで、TriAxisの使用法だけでなく、回路の違い等も理解する事で、サウンドだけでなく、プレー・スタイルにまで影響を与えてくれるかもしれません。

私達は、アンプのスタイルがプレーヤーやプレー・スタイルに影響を与える事を解っています。ですから、私達は始めからTriAxisに、伝統的な設計を再定義するような回路を授ける事を決めていました。これにより、プレーヤーは何の先入観もなく、伝統的なノブの付いたアンプから、MIDIコントロールも可能なメモリー付きの新たなアンプに、すぐに馴染む事が出来るのです。また、ソフトウェアやプログラミングを学ぶ事を促進することに繋がったのです。とは言っても、プレーヤーは好きなモードやサウンドから、そう簡単に離れられるものではありません。そこで、8つの回路を全て理解していなくても、すぐに使える工夫をしました。言葉を変えると、最小限の事を理解していれば、音が出せる様にしたのです!しかし、中には膨大なサウンドが詰まっていますので、探求すればするだけ多くのサウンドを得る事が出来ます。忘れないで下さい、ここには8つのモードがあり、各モードには個性があって、多くのサウンドが眠っているというのを。あなたの準備さえ整えば、TriAxisはいつでも音楽を探求する旅に出発する事が出来ます。また、あなたが8つのモードについて知りたいと思えば、TriAxisはいつだってその要求に応じてくれます。そして、あなたが良いプレーヤーになればなるほど、TriAxisはその手助けをしてくれるのです。

私達にも、その手助けをさせて下さい! TriAxisと共に成長していきましょう。このプリ・アンプで、真空管オーディオの歴史について学ぶ事も出来ます。ステージであれ、スタジオであれ、この伝統的なギター・サウンドは多くの人々を痺れさせ、嫌な事を忘れさせ、奮い立たせてくれます...そして全員ではないにしても、多くのプレーヤーに楽しみと満足を与えてくれる事でしょう! 時を経るにつれ、8つのモードに対する理解も深まっていき、TriAxisのポテンシャルをフルに引き出せる様になっていくはずですよ。

RHYTHM (リズム):

このグループはリズム 緑と黄の2つのモードから成っています。このモードは、リード・モードと違って、回路の構成を変更する必要がないので、単にリズム・モード1と2という形で呼び出す事が出来ます。こういった理由で、このモードは回路を一カ所にまとめる事が出来た上に、バラエティーに富んだリズム・サウンドを作る事に成功したのです。これら2つのモードが選択されているときは余裕があるので、プリ・アンプ真空管ステージを移動したり、多くのパーツを変更する事が出来ました...これができたことは、2つのモードにとって幸運だったと言えるでしょう。モード・キーで、リズム 緑 モードからリズム 黄モードに切り替えると、ボトム・エンドの太さとトップ・エンドの倍音成分が、かなり変化するのが解ります。これが2つのモードの違いです:

RHYTHM GREEN (リズム 緑):

リズム 緑 モードは、ビンテージな“オールド・ブラック・フェイス”スタイルの回路です。その低音域のレスポンスは低く、多くのサブ・ハーモニック・バス(超低音)を許容します。トップ・エンドの倍音の周波数は、リズム 黄 モードよりも若干低いのですが、ミッド・コントロールの設定によって、高く聞こえたり低く聞こえたりします。一般的に、このコントローラーを低めに設定すると、高音域と倍音成分の高い領域が、弾けた感じになります。これにゲイン・コントロールの低い設定を組み合わせると、ビンテージ・クリーン・サウンドを超える、陽気で軽快な高音と空気感のある低音のサウンドを生み出します。これこそ、TriAxisが往年のビンテージ・アンプに退けを取らない証なのです。

このモードは、他の設定でも多くの輝きを見せます。ゲインとミッド・コントロールの値を大きくしていくと、【5.5】から【7.5】で新たな感覚のサウンドが出現します。この過激な領域に入っても、クリーンなリズム・サウンドは保ったままで、ドライブさせているのです。太くて押し強いこのダイナミック・レンジの広いサウンドは、ブルース・リズム・グループや、もっと攻撃的なフレーズ等“変幻自在”に振る舞います。これは、TriAxisが最も強力で、幅広い可能性を秘めている事の証でもあります。

モード(続き):

RHYTHM GREEN(リズム 緑、続き):

さあ...続けましょう! リズム 緑 モードはロックが大好き。ゲイン・コントロールを【10】にして、ミッド・コントロールも高めに設定すると、このモードは最もカッコいいソロ・サウンドの1つになります。そこからバスを少し削って、ピッキングの攻撃が出る様にトレブルを調整すると、完全には歪んでいない、タッチ・センスの効いたリード・モードのような、ナチュラル・ギター・サウンドになります。これは、70年代から80年代始めに掛けて、多くの支持を集めたギター・ヒーロー達の、ブギー・サウンドです。70年代から80年代始めといえば、ブルースやフュージョンが変化を遂げ、ロックもメディアム・ゲイン・サウンドになり始めた頃です。この回路は、往年の名器4x10 Fender Bassmanや、Mark 1 Boogieの改良型に使用されていたものです。往年の名プレイヤー達は、ピックアップ出力に対する反応がとても良いこの設定を、こよなく愛していました。ボリューム・ノブを操る達人である巨匠達は、フットスイッチを手放して、ギターでゲインをコントロール出来る回路を選んだのです。リズム 緑 モードは、この使い方に合っているだけでなく、最もハードコアなビンテージ・ヘッドとして使用出来る事にも、驚かされます。このマニュアルの後半にあるVersion 2.0セクションをご覧になって、TriAxisの汎用性に優れた、ビンテージ・サウンドのプログラムを試してみてください。それが、TriAxisの可能性の大きさを知る、最も簡単な方法です。このモードは、柔らかく、透明感のあるクリーン・サウンドから、ドライブの効いたハウリング・ソロ・サウンドまで、幅広く網羅しています。リズム 緑 モードは、プレイヤーのあらゆる要求に答えています。TriAxisもっと深く知りたい方は...この先も読んで下さい!

ノート: リズム 緑 モードでゲイン・コントロールをとっても高い設定にすると、マスター・コントロールをかなり減衰させなければなりません。このモードのダイナミック・レスポンスは、8つのモードの中で最も大きな出力幅をもたらしています。他のモードとのバランスを考えると、ハイ・ゲイン設定にした場合は、マスター・コントロールの設定が【2.0】か【1.0】でも良い位、高いレベルの出力を誇ります。このモードではそれが通常ですが、ゲインとマスターの組み合わせが高過ぎると、ダイナミック・ボイスの入力段のヘッドルームが過入力になってしまい、クリップしてしまう可能性がありますので、注意が必要です。

ノート: ゲイン・コントロールは、ダイナミックな“輝く”回路を内蔵しています。ゲインを低めに設定すると、倍音成分の高音域がこのコントロールを通りますので、優しくて明るいサウンドを生み出します。ゲイン・コントロールを上げていくと、倍音成分の高音域がコントローラーを通過する量が減りますので、サウンドは暖かみを増していきます。ゲイン・コントロールを上限まで上げると、出力される信号から倍音成分の高音域が無くなってしまいます。このようなゲイン設定にしても、プレゼンス・コントロールで高音域を少し戻す事は出来ます。ゲイン設定を低めにすれば、ミッド・コントロールとバス・コントロールのバランスで倍音成分の高音域をコントロールする事が出来ますので、それほどプレゼンス・コントロールを使う必要は無くなります。

RHYTHM YELLOW(リズム 黄):

リズム 黄 モードは、リズム 緑 モードのレスポンスと大きく異なります。ボトム・エンドの量、周波数ともに、明らかに異なる事がすぐにお解りになる事でしょう(周波数が少し高くなり、量が少し減っています)。このリズム・モードはタイトで、アタックにより緊迫感があります。トップ・エンドも異なります。リズム 緑 モードよりも周波数が高く、よりパーカッシブになります。これらの違いは結果的に、より圧縮が少なく、よりオープンでクリーンなサウンドになります。このモードは、系統としてMark IV、III、そして最終的にはIIC+に戻ったような感じです。ブギー中毒に陥っている人にとってこのリズム・モードは、ルーズな、そして太いサウンドという点では、リズム 緑 モードよりも勝っていると言えるでしょう。大規模なステージやアリーナ・タイプの会場に於いて、このモードは“押しの強さ”を前面に出す事が出来ます。それは低音域の激しさが少ないからです。サブ・ハーモニックが強いと、ステージ上のマイクがそれを拾ってしまい、フィードバックが発生してしまう事があるのです。サブ・ハーモニックが少ないと、パワー・アンプのワットageあたりのパワー・ロスが少なくなります。これにより“ヘッドルーム”に余裕が生まれます。特に大規模なバンド編成では、キーボードやベースが低音を占有します。このような時に、リズム 黄 モードは、タイトさを失いませんし、他のパートを邪魔する事ありません。ファンクやテクノに於ける、リズム・トラックのレコーディングやライブ・パフォーマンスで、“ギターを直接ミキシング・ボードに繋ぐ”光景を目の当たりにして、がっかりする事が良くあります。最近ではむしろ主流になりつつあります。しかしながら、アンプ・シミュレーターを使用したとしても、弦を弾く感覚は酷いものです。リズム 黄 モードを使えば、その心配は必要ありません。ファンク・スターも、このモードの明瞭なサウンドの虜になる事でしょう。ゲイン・コントロールを低めの【3.5】から【5.0】に設定して、ミッド・コントロールで中音域を減衰させれば、そのサウンドは既にそのままミックス出来てしまいます。ミキシング・エンジニアがEQを操作する必要もありません。リズム 黄 モードは、レゲエ・ジャムに於けるベース・ラインに沿った演奏でも輝きを放ちます。ピッキングする方の手のひらに、フェルトを持ってピッキングしているような、ミュート・サウンドも可能です。他にも様々な状況が考えられます。リズム 黄 モードは、プログラムのクリーン・サウンドを遥かに超えるオリジナル・サウンドを作り出す事が出来るのです。まだまだ、終わりません。

モード(続き):

RHYTHM YELLOW(リズム黄):

リズム 緑 モード同様、リズム 黄 モードも、ゲイン・コントロールで形作ったサウンドをトーン・コントロールで変化させられる、ダイナミックな回路を搭載しています。また、ゲイン・コントロールを低めに設定すると、トップ・エンドの倍音成分がコントローラーを通過します。反対にゲイン・コントロールを高めに設定すると、コントローラーを通過する高域成分が減少し、それに代わって低音域と中音域が支配する様になります。

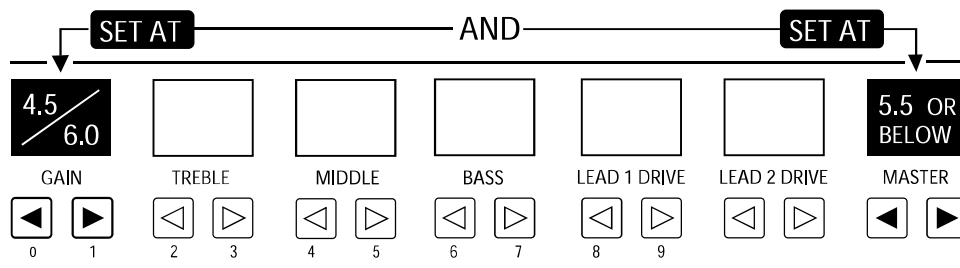
それゆえ、ゲイン・コントロールを【6.5】以上といったような高い設定にすると、リズム 黄 モード本来の特質が失われ、メロウさが無くなり、暗めのサウンドになります。ゲイン・コントロールを【6.5】から【8.5】にすると、リズム 黄 モードは、“ディストーションの掛かり始め”ようするにセミ・クリーン・サウンドになります。その緊迫感と切れにより、無機質な雰囲気が出てきます。

リズム 黄 モードでゲイン・コントロールを8.5以上に設定すると、もう1つのリード・ドライブ・モードとも言うべきものになります。それは限界領域を超えた、まぎれもないゲインです! ミッド・コントロールもまた強力なツールであり、このコントローラーはタイプを決定付けます。ミッド・コントロールを高めに設定すると、さらなる飽和状態が発生し、ギター・サウンドのテイストが豹変します。リズム 緑 モード同様に、ゲイン・コントロールとミッド・コントロールを高めに設定したら、他のモードとバランスを取る為にマスター・コントロールを低く設定しなければなりません。トレブル・コントロールとプレゼンス・コントロールでは、ピッキングのアタックとオープン度合いを微調整して最終的な色づけを行います。リズム 黄 モードでゲイン・コントロールを“最大値”にすると、もう1つの強力なソロ・サウンドになる事も見逃せません!

このモードには、リズム 緑 モードに負けず劣らず多くの使い方がある事、そして長年に渡るブギー信奉者達が信頼する、忠実なサウンドである事がお解りいただけただけな事でしょう。

ノート: 右端のパラメーター・キーは、このマニュアルの前半で説明した内蔵EQ回路、ダイナミック・ボイスをコントロールします。これは、ブギー回路に働きかける、強力な5バンドのグラフィック・イコライザーです。これは低音域と高音域のレスポンスを同時に高める働きをして、サウンドの広がりやダイナミック・レンジを拡張します。この機能は、リズム 黄 モードの中でも“細く”そして“瘦せた”特質のサウンドを、太くする働きをします。このパラメーターを【4.0】以下に設定すると、クリーン・リズム・サウンドに有効な効果が掛かり、リズム 緑 モードで、この値をダイナミック・ボイスが殆ど掛かっていない【1.0】から【2.0】に設定すると、太くてピンテージなテイストに変化します。反対にこの値を高く設定すると、鈍くて惚けたサウンドになります。したがって、リズム 緑 モードでダイナミック・ボイスを使用する場合は、控えめにする事をお勧めします。この極めて強力なEQ回路を使用するのは、むしろリズム 黄 モードと言えます。

ノート: リズム 緑 モード同様、リズム 黄 モードでは、ダイナミック・ボイスの入力段で完全なクリーン・サウンドを保つには高過ぎるレベルの信号を生み出すことができます。レベルが高くなり過ぎない様にする為には、バランスのルールを守って下さい。ゲイン・コントロールを最大にしたらマスター・コントロールを最小にする。これにより、不必要なクリップを避ける事が出来ます。“最もクリーンな”クリーン・サウンドにするには、ゲイン・コントロールを【4.5】から【6.0】に、そしてマスター・コントロールを【5.5】以下に設定します。この設定にして他の設定とバランスがとれない場合は、パワー・アンプのレベル・コントロールで全体を上げて、他のプリセットのマスター・コントロール設定を全て下げて下さい。これで、ボリューム・レベルと、クリーン・リズム・サウンドに最適なヘッドルームの設定が出来た事になります。下記の例を参考にして、クリーン・サウンドの完璧な設定をチェックして下さい。



これで、レイアウトと各リズム・モードの個性については、さらに理解が深まった事でしょう。ただ問題は、欲しいサウンドを探し求めるのに膨大な時間を必要とする事です。しかし心配はいりません。欲しいサウンドは必ずありますので、根気強く取り組む事です。慌てる必要はありません... 気楽にいけば見つかります。私達を信じて下さい! 私達はこの2つのモードの為に1年以上を費やしているのですから。ちょっとおかしいんじゃない? 神経症なの? はたから見ればそうかもしれませんが、しかしそれはむしろ“使命感”とも言えるものなのです。それをご理解いただきリード・モードに進みましょう。

LEAD MODES (リード・モード):

LD1 (リード1) ○○○:

この3つのモードのグループは、TriAxisの中で最も古く、伝統的な基本に基づいたリード・モードです。この3つのモードには、共通する事が1つあります。それは、アンプ回路の中で、ゲイン回路がトーン・コントロールの前に位置しているという事です。これは、12AX7 真空管によるゲインのブーストが、トーン・コントロールよりも先に“優先的”に行われるという事を意味しています。この方式でゲイン・コントロールを行うと、サウンドの明瞭度を殆ど損なう事無くトーン・コントロールを行う事が出来ます。多くのプレイヤーは、このルーズで広がりのあるサウンドを、感情を込め易いソロ・スタイルの演奏で使用します。また、この回路は低音成分を多く含ませる事が出来ます。ゲイン・コントロールが後半にある回路と反対に、このタイプの回路はトーン・コントロールで低音成分を強調しても、サウンドがよれたり曇ったりする事はありません。極端なハイ・ゲイン・メタルやハード・ロックに傾倒しているプレイヤーは、リード1モードでゲインを最大にした時に得られる、クランチ・サウンドを好むはず。このタイプを好む方には、リード・モードの中でも特にリード1赤モードをお勧めします。これらのモードには、ダイナミック・ボイス機能はあまり合いませんので、まずはダイナミック・ボイスを使用せずに音作りをする事をお勧めします。このEQは本来、ゲイン・コントロールがトーン・コントロールの後にある、リード2モードの為に設計されています。以前のブギー製品をお持ちの方は、家で試してみてください...特にMK II, III, IVには、グラフィック・イコライザーが搭載されています。ダイナミック・ボイスをリード1モードで使用しても特に問題が起こるわけではありませんが、EQのポイントは、リード2で使用する事を前提に設定されています。しかし心配はいりません...リード1でダイナミック・ボイスを使用する事は出来ますし、アンプを傷めるわけでもありません。私達はただ、ダイナミック・ボイス回路の設計思想をご理解いただきただけなのです。

LD1 GREEN (リード1 緑) *○○○:

このモードはまさにビンテージ! ブギーMark 1をベースにしたこのモードは、ブギーを一躍有名にしました。カルロス・サンタナは、1970年にこのモードのサウンドを聴くと、たちまち虜になってしまいます! Abraxas (サンタナのアルバム)は発表されるやいなや大ブームに!...ブギーの輝かしい歴史の始まりです。その後長年に渡り、Mark 1は人気のあるサウンドであり続けています。実際に... Mark 1は1990年に再販されています。リード1緑モードは、Mark 1の入力1を忠実に再現しています。このモードはブルースに向いた、太くて暖かみがあって丸いサウンドです。また、柔らかく弾けるような高音域は、ブラック・フェースの時代を思い出させてくれます。リード1 緑モードは、ギター本来のトーンを崩す程歪ませる事はありませんので、ブルースやリズム・ワークに最適と言えます。ギターのボリューム・コントロール・ノブを下げて、ロー・ゲインの設定にする事が出来ます。往年の名プレイヤーのサウンドをこの回路で実現するには、右に回しきるよりもむしろ控えめの設定にすると良いでしょう。そこに、このリード・モードの感度の良さやダイナミクスを生かすヒントが隠されています。

1. Mark 1の入力1を知っている人にとっては、2つのボリュームあるいはゲイン・コントロールでトーンをコントロールする事は、それほど驚く事ではないでしょう。言い方を変えると、VOLUME 2は少しのコントロールでサウンドに大きな影響を与えるということです。TriAxisのリード1 緑モードと黄モードは、フロント・パネルのレイアウトがちょうど反対ではありますが、コントローラーの構成は、Mark 1と同様になっています。リード1 緑モードでは、最初のコントローラーがLEAD 1 DRIVEになっています。2番目がゲイン・コントロール。これはリード2にとっても重要です。Mark 1の回路では、この2つのコントロールでステージとゲインの量を決定します。Mark 1のプレイヤーは、VOLUME 2 (TriAxisではゲイン) をVOLUME 1 (TriAxisではLEAD 1 DRIVE)と同じか、それよりも高く設定すると、最も暖かみのある太いサウンドになる事を知っています。これにより起きる飽和は、フレットのビリつきをかき消してくれます。高音域がもう少し欲しいときは、歪み成分を減らします...その為には、LEAD 1 DRIVEを高いままにして、ゲインを減らします。基本的に次の様にします: LEAD 1 DRIVEよりもゲインを高く設定すると、サウンドが歪んでいきます。反対にLEAD 1 DRIVEをゲインよりも高く設定すると、明るめのサウンドになります。

2. リード1 緑モードでは、トレブル・コントロールとミドル・コントロールは両方とも、ゲイン・コントロールにとっても有効です。各コントローラーの周波数帯域のゲインを付加する事が出来ます。このモードのプリセットで最大のゲインを見つけるには、ゲイン・コントロールとLEAD 1 DRIVE コントロールをいろいろ試して下さい。様々なタイプのゲイン・コントロールで素晴らしいサウンドを見つけられます。このモードでは、ミドル・コントロールを10kにしてトレブル・コントロールとバス・コントロールを両方とも0.0に設定すると、面白いサウンドになります。歪み成分に注意して設定すると、ピッキングの攻撃が少し弱い、暗めのサウンドになります。そのような場合には、プレゼンス・コントロールを少し加えると良いでしょう。

さらに試してみましょう... リード1 緑モードは、TriAxisの全てのリード・モードの中で最も汎用性の高いモードと言えます。完全な飽和状態を必要としない、全てのスタイルに最適です。

LEAD MODES (リード・モード、続き):

LD1 GREEN (リード1 緑、続き) *○○○:

真空管が生み出す最も柔らかくて優しいクリップ・サウンドを目の当たりにすると、このモードのR&Dに掛けてきた長い時間を認めて頂ける事でしょう。私達がお手本にしてきたビンテージ・アンプ、Mark Iのデラックス、スーパー、JTM 45、そしてその他多くのビンテージ・クラシック・アンプのサウンドは、リード1 緑モードの中にたくさんあり、弦を弾くフィーリングの良いサウンドも多く含まれています。リード1 緑モードのディストーション・サウンドは、ロー・ゲイン設定で輝きを放ち、このモードを代表するサウンドである事は疑いの余地がありません。

LD1 YELLOW (リード1 黄) ○*○○:

このモードの基本的な構成は、質、動作等においては、リード1 緑モードと同じです。しかしリード1 黄モードでは、いくつかのパートが切り替わります。それがこのモードの個性にも繋がっています。

まず、初期のカソード段階でゲインが付加されるので、サウンドがタイトで明瞭になります。これにより飽和度が増しますので、音の伸びが大変良くなります。そして、中音域から中高音域がブーストされます。これによりアタックの立ち上がりは変化して、明るさが減って太さが増し、サウンドが重くなります。それと同時に、これら2つの要素が互いに影響し合う事で、このモードの伸びの良いサウンドに瑞々しさとスムーズさを与えています。この傾向は、トレブル・コントロールとプレゼンス・コントロールを【5.0】以下の低い設定にすると、顕著に現れます。基本的に、リード1 黄モードはリード1 緑モードよりも、全体的に暗く暖かみがあってスムーズなサウンドです。“フュージョン”プレイヤーは、このモードの歌うような、そして空高く舞い上がるようなソロ・サウンドを好みます。トーンには広がりがあり、このようなリード・ボイスを生み出すのに特別な処理は殆ど必要ありません。リード1 黄モードは、ロック・サウンドに最適ですが、もっと激しいサウンドにしたい場合は、ゲイン・コントロールとLEAD 1 DRIVEコントロールを、共に【8.0】位に設定すると良いでしょう。この方法では、本物のクランチ・リズム・サウンドを生み出す事も出来ます。しかし、このモードではバス・コントロールの設定に注意が必要です。リード1 黄モードのハイ・ゲイン/ドライブ構成でバス・コントロールを【4.5】以上に設定すると、鈍くて締まりの無いサウンドになってしまいます。バス・コントロールを高く設定したい場合は、リード1 赤モードにして調整しましょう。リード1 赤モードについては次の項で説明します。

LD1 RED (リード1 赤) ○○*○:

狂気、究極、制御不能、真に至高のゲイン。それがリード1 赤モードです。その構成は、TriAxisの中でも他の回路とは一線を画しています。実際にこのモードは、回路の中でも独立しています。そうです！リード1 赤モードを選択すると、信号は完全に独立した回路に送られます。その回路は、オーディオ・マザーボードの上に積まれており、1つの独立したプリ・アンプ基盤として動作出来る程です。リード1 赤モードは、他のモードとは正反対のプリ・トーン・コントロール回路になっており、私達が今まで製造してきたどのプリ・アンプよりも大きなクランチ・サウンドを生み出します。この基本的な設計思想は、私どものデュアル・レクティブアンプ・ソロ・ヘッドのビンテージ/オレンジ・チャンネルに触発されています。そこから得たものとは...基本的なゲイン構成と、トーン・コントロールの値や特性です。その特色をより先鋭化した事で、パワー・セクションの異なるタイプにもよりよいレスポンスをもたらしています(弊社のサイマル・クラス・ステレオ290パワー・アンプを使用すると最も良いパフォーマンスを引き出せます)。

このモードは、6つのリード・モードの中で最も攻撃的なモードです。そのボトム・エンドの豊富さは、多くのプレイヤーが知るところです。また、トップ・エンドはアタックをとて鋭いものになっています。ミドル・コントロールは、デュアル・レクティブの様に極めて強力です。低めに設定すると、とても優しく、中音域が減衰した瑞々しいサウンドになります。ミッド・コントロールを大きくするにつれて、リード1 赤モードの本領発揮です。それは、このまま上げて本当に大丈夫なのかと心配になってしまう程です。このモードをクランチと再定義したくなってしまいます。リード1 赤モードをもっと知る為のヒントを記します。

1. このタイプの回路のゲイン・コントロールは、殆どのヘッドが個別の抵抗値で行っています。TriAxisでは、モードの操作によって変化する、“可変抵抗値”を用いています。ただしこれは“多ければ良い”というものではありません。この方式の回路だと、事前に予想していないレベルまでゲイン・コントロールで上げてしまう事がありますが、それが必ずしも良いトーンやレスポンスに繋がるわけではありません。似たような回路で固定抵抗素子を使用している事からもそれが解ります。回路内でその抵抗値を決定するのはとても大変な作業であり、実際にこの作業がモードや“アンプ”の善し悪しを決定するといっても過言ではないのです。その中でも、この値の影響を最も大きく受けるのはアタックで、ゲインが大きくなり過ぎると...回路内のこの後の行程で失われた“アタックを取り戻す”事は困難です。それ故に...この作業は入念に行われなければなりません。

LEAD MODES (リード・モード、続き):

LD1 RED (リード 1 赤、続き) ○○✱:

ゲイン・コントロールを6.0に設定すると、このスタイルの回路で良く使用される抵抗値になります。事実、レクトのビンテージ/オレンジ・チャンネルの抵抗値と同じ値です。ファクトリー・プリセットの01では、ゲイン・コントロールの設定がそうになっている事を確認して下さい。長い時間を掛けた比較試験の末に、ゲイン設定の値が決定されています。主な“ゲイン”コントロールとしてLEAD 1 DRIVEコントロールを使用すると、より短い時間で欲しいトーンに辿り着けます...にもかかわらず、遠回りするのですか?

2. TriAxisに搭載されているバス・コントロールは、変幻自在です。このコントローラーは、リード 1 赤モードでも他の7つのモードでも、2つの機能を果たします。コントローラーの値が【5.5】から【0.0】では、バス・コントロールは他のアンプと同様の抵抗値を使用します。一方【6.5】から【10】は、リード 1 赤モードで低音成分のレスポンスを向上させる為に、特別に用意されたものです。この2面性を持ったコントローラーは、他の7つのモードでは極端な働きをしますので、鈍くて惚けたサウンドにならない様に、バスは控えめな設定をして下さい。他の7つのモードは、元々兼ね備えている暖かみのあるサウンドを殺さない為に、バス・コントロールは、出来るだけ【5.0】よりも大きな値にはしない様にして下さい。リード 1 赤モードでは、バス・コントロールを大きめに設定しても、鈍いサウンドにはなりません。このモードでは、2本の低音弦は重低音のクランチ・サウンドになり、2本の中音弦は“空洞の丸太”のような感覚があります。この2つの周波数帯域に於ける感覚は、他の7つのモードにはあまり関係がありません。それは、他の7つのモードでバス・コントロールを【6.5】から【10】に設定する事は無いからです。リード 1 赤モードは、他の回路では聞く事の出来ない程タイトなボトム・エンドを可能にしています。

3. プレゼンス・コントロールは、回路の最終段に位置していますが、リード 1 赤モードのサウンドに大きな影響を与えます。このコントロールは極端に低かったり高かったりしないと、殆ど解りません。これが普通であり、特に警告はありません。トレブル・コントロールとミッド・コントロールが、サウンド形成に大きく影響します。リード 1 赤モードに似ている回路のプレゼンス・コントロールは、通常アンプのパワー・アンプ・セクションにあります。リード 1 赤モードでは、プレゼンス・コントロールをピッキングのアタックとノイズを微調整する為に使用しますが、他の7つのモードでは、形作ったサウンドを強調する為に使用する様に設計されています。パワー・アンプに搭載されているプレゼンス・コントロールでは、リード 1 赤モードのサウンドにアタックと倍音成分を加える為に使用して下さい。

リード 1 モードは、幅広い汎用性を持った3つのグループで構成されており、様々なリード・サウンドを提供します。プリ・トーン・コントロール回路のアンプを3台持っているようなものです。各モードは、強烈な個性を持っています。TriAxisのオーナーになれば、これらのクラシック回路のサウンドを、自宅で堪能出来るのです。

LD2 (リード2) ○○○:

3つのタイプの異なる回路を搭載したグループです。リード2モードのグループは、ポスト・トーン・コントロール・ゲイン回路で構成されています。1980年に、メサは初のデュアル・モード・フットスイッチ・アンプ、Mark IIを発表し、ギター・アンプ業界に革命を起こしました。この特許技術である“リア・エンド”リード回路は、ギター・アンプに対する考え方を根本から覆すものでした。それは、ノブに触れたり、モードやチャンネルを変える事無く、リード・サウンドを切り替えるというものであり、アンプの新しい時代を牽引したのです。14年の月日が流れ、数回の世代交代を経た今、TriAxis で新たな成果として結実しています。今日に至るまで、この革命的な回路は私達のアンプ設計のコンセプトの中に息づいています。その設計思想は、Mark II-B、II-C+, Mark III、そしてMark IVと受け継がれ...伝説のリア・エンド・リード・サウンドが...今ここに甦る! リード2モードは、これらのクラシック・リード・サウンドに敬意を捧げ、さらにバリエーションを拡げる事がテーマとされました。このモードのサウンドは、はっきりとした明瞭なリード・サウンドです。メサのアンプを知らずに育ったプレイヤーは、まず最初に、そのドライで固いサウンドに驚かれるでしょう。そして時間が経つにつれ、このモードの奥深さが解ってくるはずですが、不正確な演奏を虫眼鏡で探さなければならない位、単純に“余計な音”が少なくなります。とても教え方が上手な先生が、アンプの中に入っているような感覚です。入力された音が素直に出力されます。全てのモードを知るには多くの時間要しますが、マスターした暁には素晴らしいサウンドが待っている事を保証致します。時間を割けば、あなたのプレイヤーとしての技量も上がっている事は間違いありません。このアンプへの理解が深まるにつれて、良いサウンドを生み出せるようになり、ステージ上での自信も深まっていく事でしょう。緊迫感のあるアタックとタイトなカットオフが、ハイ・ゲインのリズム・サウンドを生み出します。ダイナミック・ボイス機能を使用すると、低音と高音が強調され、リード2モードでは、簡単に豊かな低音を手に入れる事が出来ます。しかし、リード 1 モードでは、タイトさと明瞭度があまり生かされません。豊かな低音域は、スタジオや大規模なバンド演奏の中で活きます。通常では、低音域をカットして、明瞭度を上げる方が得策と言えます。リード2モードはミックスにとっても馴染みます。ですので、ここからは、このとてもかっこいいリード回路について詳しく見ていく事にしましょう。

LEAD MODES (リード・モード、続き):

LD2 GREEN (リード2 緑) *○○○:

リード1モードと異なり、リード2モードは3つ共にゲインの量が似ています。リード2モードでは、3つのモードがそれぞれ異なる周波数でブーストされます。これにより、プレイヤーは使用する楽器、あるいは、演奏する楽曲に応じて特定のモードを選択する事が出来ます。

リード2モードは、MK IIスタイルを基本にして設計されています。リード2モードの3つの内2つのモードは特に、永きに渡って絶賛されてきたクラシック・ブギー・アンプ、MK IV と Mark II C+を手本としています。その2つのモードとは、緑モードと黄モードです。緑モードの回路は、Mark IV のリード・チャンネル 1 を直接適用しています。緑モードのゲインに注目すると、それは1989年にMark IV のミッド・ゲインに追加されたコンセプトであり、アタックと、サウンドの“肉付き”である設定周波数が低めの中音域を強調するものでした。この周波数帯域が強調される事で、豊かで太いサウンドを実現しながら、メロディアスなフレーズに合うサウンドを生み出しています。パンチがあって正確なアタックを保ちながら、サウンドが分厚いという表現も出来ます。ゲインを高め設定すると、完全に飽和したサウンドになりますが、アタックの特性に関しては、ゲインが低い時と変わりません。これが、往年の名プレイヤーに緑モードが好まれる理由です。その分厚くパンチのある中音域は、高音弦でメロディーを演奏しても芯が無くなる事はありません。ゲインとドライブを高め設定して、高い音を演奏すると、空に舞い上がっていくような感覚がありますが、決して他のサウンドに埋もれるような事はありません。緑モードは、フレットの鳴りや、間違った設定をした楽器の余計な音を取り除いてくれるので大変便利です。余分な音を取り去ってくれるので、音符が純粋に綺麗に聞こえます。この傾向は、出力の小さなシングル・コイルのピックアップで、ソロ演奏をしている時に顕著になります。リード2モードは、このような窮地を救ってくれます。このモードは必要な周波数を付加してくれますし、その太いリード・ボイスを生み出すゲインは、ステロイドの様に癖になります。緑モードはいつでも必要な時に選択出来ますし、素晴らしいサウンドをいくらかでも提供してくれます。緑モードは、シングル・ノートの権威です。

ノート: リード1 赤モードの項で既に述べた様に、ゲイン・コントロールの設定は全てのモードで、とても強い影響力を持っています。各モードにはそれぞれ、最適なゲイン・コントロールの設定値があることを示し、ファクトリー・プリセットを紹介してきました。最終的にはそれらを参考にして、プレイヤー自身が様々な設定を試しながら、良いサウンドを見つける事になります。ここでリード2モードにおける簡単な“原則”についてお話しておきます。まずは、ゲイン・コントロールでアタックとトーンのバランスをとるという事です。そして、3つのリード2モード全てで次の設定を試して下さい。ゲインの値を【7.0】あるいは【7.5】(楽器の出力レベルによる)に設定して、ロー・ゲインのブルース・サウンドあるいはメディアム・ゲインのソロ・サウンドにする。ハイ・ゲインのロック・サウンドにするには、ゲイン・コントロールの設定を【7.5】から【8.0】(ピックアップの出力レベルによる)にすれば十分でしょう。

ゲイン・コントロールの設定を推奨値よりも大きくすると、アタックが鈍くぼやけた感じになり、一旦そうなると、バス・コントロールで取り除くのも難しくなります。反対にゲインの設定を低くすると、高い倍音成分が多くなり、薄くざらついたサウンドになります。他のモード同様に...まずはファクトリー・プリセットをチェックして、各モードのバランスを確認して下さい。それから各コントローラーを微調整すると良いでしょう...とにかく試してみる事です!

LD2 YELLOW (リード2 黄) ○*○○:

これはまさしくブギーです。このモードのサウンドは、紛れもない“カリフォルニア”サウンド、あるいは“L.A.”ギター・トーンです。ルカサー、ランドウ、カーギー、リンチ、ギリス、プリンス、そしてメタリカといったギタリストやバンドが、1980年代にヒット曲に乗せて世に放ったギター・サウンドそのものです。メタリカは、今でも純粋なC+のヘッドを探し続けており、彼らのアンプ・コレクションを増やしています。また、レコーディングに於いては不可欠なものになっています! リード2黄モードは、伝説的なMark II-C+のリード・モードの生まれ変わりです。その太くてパンチのある、瑞々しい倍音成分が生み出すリード・ボイスは、プレイヤーをトリップさせて...巨匠達の気分を味あわせてくれます。低音域は、タイトさと緊迫感を保ちながらも、獐猛に唸りを上げます。中音域は、“にぎやか”で躍動感に充ち、高音域は、爆発的で瑞々しいだけでなく、高音弦から繰り出される官能的なサウンドが、全てのプレイヤーを魅了します。Mark II-C+のサウンドがいっぱいです...(およそ4500にのぼります)...このモードのサウンドはあまりも多いので、殆どのプレイヤーが、使い始めて2、3年経ってからも、新しいサウンドに出会っている程です。

LEAD MODES (リード・モード、続き):

LD2 YELLOW (リード2 黄、続き) ○*○:

リード2黄モードは、中位から高めにゲインを設定すると、倍音成分が綺麗に重なるのでとても素晴らしいサウンドになりますが、ロー・ゲイン・サウンドも甘く見てはいけません。ハイ・ゲイン・サウンドは高音域が賑やかなのに対して、ロー・ゲインにすると、鋭いブルース・ソロ・サウンドを生み出します。リード2モードの中では、黄モードは緑モード程飽和しないので、サウンドは細くなり、カッティングやクリーン・ブルース・ラインに向いています。リード2黄モードでは、プリセットの倍音成分の量をコントロールするのに、プレゼンス・コントロールが強烈に効きます。プレゼンス・コントロールとトレブル・コントロールを低めに設定すると、ホーンや声のようなサウンドになります。プレゼンス・コントロールとトレブル・コントロールを高めに設定すると、焼け付くようなサウンド・キャラクターに変化します。やり過ぎに注意しましょう!

ロー・ゲイン・サウンドでしなやかなバックング・サウンドを奏でようとも、ハイ・ゲイン・サウンドでシングル・ノート・マシンとして自己主張をしようとも... リード2黄モードは、ひときわ輝きを放ちます。これがTriAxisの最も価値のある埋蔵された宝物なのです。

ヒント: ダイナミック・ボイス・コントロールは、限られたスペースに収められた、プログラム可能な5バンドのグラフィック・イコライザーです。5バンドのグラフィック・イコライザーは、これまでにブギーのコンボやヘッドにも搭載されています。この回路は、リード2モードでは、トーン・コントロールの後ろに位置していますので、その働きは強烈です。工場出荷時のプリセット・カーブは、低音域と高音域がブーストされ、中音域が少し減衰しています。この特性は、元々中音域が強いこれら3つのモードのサウンドに良く合っています。その相性は、これらのモードの為にカスタム設計したのではないかと思います。このコントロールの値を増減した時のサウンドの変化は、モードが元々持っている個性をさらに際立たせるものになっています。この機能を使いこなせれば、このコントローラーはあなたのサウンドのカスタマイザーになる事でしょう。このプリセット・カーブは、必ずあなたの音楽に役立つはずで、慌てる必要はありません...じっくり取り組みましょう!ダイナミック・ボイス機能の概要については、このマニュアルのコントロール・セクションをご覧ください。

LD2 RED (リード2 赤) ○○*:

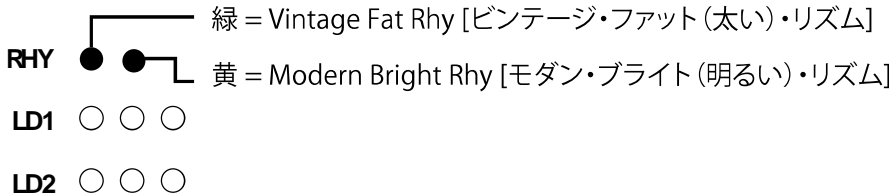
このモードは、サウンドをずたずた(SHRED)にします。モードの名称もLD2 SHRED (リード2シュレッド)にしても良いくらいです。トップ・エンドは黄モードと比べてかなり攻撃的ですし、高次倍音も相当強調されています。基本的なモードの構造は殆ど一緒ですが...リード2赤モードが選択されると、パーツが追加されて、一旦とったバランスが全て崩れてしまいます。倍音成分がブーストされ、少し低めの周波数に設定されたトレブルが、リード2赤モードに鋭いエッジを加えるので、独特のサウンドになります。エッジの効いた倍音成分は、高音だけでなく...ロー・エンドのクランチ・サウンドにも影響を与えます。これは高音弦に歯切れの良さを与えるだけでなく、低音弦にも唸るような低音を授けます。この回路によって強調される周波数帯域は、一般的なパワー・セクションのプレゼンス・コントロールよりも、少し高めに設定されています。パワー・セクションでのプレゼンス・コントロールは、TriAxisのプレゼンス・コントロールよりも微調整が難しくなります。これらの高音域はコントロールが難しく、そのサウンドのクオリティーは、ヨーロッパ・スタイルのEL34/パワー管を使用したブリティッシュ系のヘッドと関連しています。この手に入りにくいサウンドは、弦を弾く感覚に影響を与えるので、プレイヤーは独特な気分になります。

数々の完璧なギター・サウンドを作り出す為に、TriAxisは最大限の力を発揮します。そのサウンドの多くは、リード2赤モードにあります。リード2赤モードで何かが不足していると感じたら、いつでもダイナミック・ボイス・コントロールを使用して、低音と高音を付加する事が出来ます。この時ボトムを強調する為に、中音域は少し減数させています。それでもまだ足りないなら...もう1台のTriAxisとメサ・ハイ・ゲイン・アンプ・スイッチ(このマニュアルの最後をご覧ください)を使用して下さい。そうすることで、1台のTriAxisリード2赤モード、もう1台のTriAxisをリード1赤モードにして、その2台の出力をミックスする事が出来ます!気が狂ってるんじゃないかって?笑わないで下さい...驚かれるかも知れませんが、実際に2台のTriAxisや、TriAxisと他のヘッドを同時に使っている方がいらっやいます。しかしこれにはやはりお金が掛かります。私達は、1台のTriAxisでも十分と考えています。どちらにしても、リード2赤モードは、明瞭度も緊迫感も共に兼ね備えた素晴らしいサウンドである事は間違いありません。そして、リード2緑モード、黄モードで話した事と同じ事が赤モードにも言えます。それは、ゲイン・コントロールには注意が必要という事です...リード2赤モードのファクトリー・プリセットを利用してチェックしてみてください。

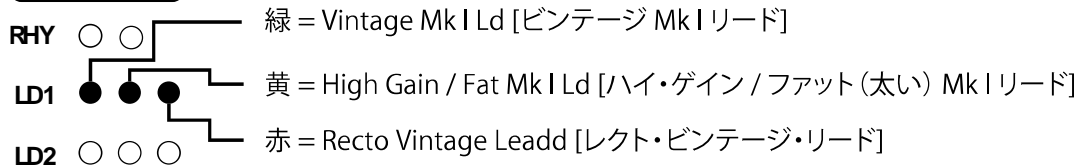
モードの概要:

ここまで、各モードについて詳しく見てきました。さらに詳しく知る為に、ここでいくつかのスタイルと、ちょっとしたキーワードを示します。モードを簡単に知る目安になればと思っています。

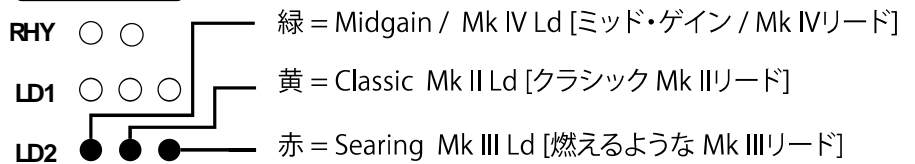
RHYTHM



LEAD 1



LEAD 2



忘れないで下さい...これら8つのモードは、それぞれが完璧なプリ・アンプです。各モードにはそれぞれ独自の個性や長所があります。あなたのサウンドや音楽に最も合うサウンドを見つけられるかどうかは、あなたに掛かっているのです。出来れば、各モードの解説をしっかりと読んでから、いろいろと試す事をお勧めします。それぞれのモードが、あなたの音楽やサウンド作りを触発してくれる事は間違いありません。出来るだけ固定概念を持たない様に、サウンドに細かく名前を付ける事は避けました。例えば...リズム・モードのソロ...リード・モードのグループ・リズムといったものです。付けてある名称は大枠のタイトルと捉えて下さい。各モードは、それぞれが多量の音楽に対応出来る様に、汎用性を待たせて設計しています。全ての機能とモードを使いきる為には、何年もの歳月が掛かる事でしょう。このマニュアルを読んでもっと知りたい事が出てきましたら、私たちにご連絡下さい。皆さんの力になれるよう、出来る限りの努力を致します。

TriAxis バージョン 2.0:

コンティニューアス・コントロール・ソフトウェア:

ご使用のTriAxisのプロセッサには、バージョン2.0ソフトウェアがインストールされています。このソフトウェアは、ユーザーから見えるものも見えないものも合わせて、数多くの修正を施しています。それらの中で最もエキサイティングなのは、MIDIのコンティニューアス・コントロール・メッセージを扱える様になった事でしょう。これは、皆さんが良くご存知のMIDIキーボードや、MIDIエフェクト・プロセッサではなく、ペダル・コントローラーで、TriAxisの全てのパラメーターを、リアルタイムでコントロールする事が出来るのです!

想像してみてください! ゴージャスに弾けるようなプリセットを選択していて...ペダルを踏み込むと、モードもプリセットも変えていないのに、いきなり“ビンテージ・アンプのクランク”ソロ・サウンドになるのです。同様に反対の変化にする事も出来ます。リード・サウンドを呼び出しておいて、ゲインを下げ、ミッドも落としてプレゼンスとマスターを上げると、押しの強いリズム・サウンドになります。可能性は無限です。1つのペダルで上げたり下げたり、全てのコントロールをプログラムする事も可能です。

TriAxisは全真空管のオーディオ機器ですので、トーンを損なう事無くサウンドを変化させる事が出来るのは、コントロール・チェンジ・ソフトウェアしかないと考えました。VCA方式ではなく、基本的に“ノブを回す”(TriAxisの場合はキー)方式にして、望むサウンドにだんだん近づけていくようにしました。この方式にした事により、オーディオを純粋なままキープ出来るだけでなく、サウンドを聴きながら設定する事が出来ます! 各プリセットをあなた自身で変更する事で、多くの偉大なサウンドを生み出す事になるのです。それでは実際に、ギター・システムにサウンドをたくさん詰め込んでいきましょう。

まずは、エクスプレッション・ペダルを用意して下さい。これをシンプルアナログ・ボリューム・ペダルとして使用します。次にこのアナログ・オーディオ・ボリューム・ペダルを電圧コントロール・ペダルに変換します。これにはいくつかの意味があります。今日市場に出回っている多くのMIDIフット・コントローラーは、1つあるいは2つの標準フォーン端子を備えています。あなたが既にフット・コントローラーをお持ちで、それがそのタイプでないとしても心配しないで下さい。それはあなただけではありません。事実、メサブギーのAbacusもそのタイプではありません。この製品は、MIDIのコントロール・チェンジ・ソフトウェアが開発される前の製品なのです。

それでは次に、コントロール・チェンジの専門的な事について説明していきます...作業の中に出てくる専門用語の説明もします:

1. 基本プリセット: これはRAM (ランダム・アクセス・メモリー) 内にあり、コントロール・チェンジの設定を含む、あなたのカスタム設定が入っています。TriAxisには90ものメモリー空間があり、コントロール・チェンジをする時に必要な“ホームベース”もここにあります。他の言い方をすれば、オリジナルのプリセットから初めて...“ペダルを踏んだら、これと、あれと、それをコントロールしたい”そしてペダルを戻したら“その速度を緩めたい”と言っているようなものです。“ベース”に行くと元のプリセットに戻ります。

2. パラメーター: これはフロント・パネルのコントローラーです: GAIN (ゲイン)、TREBLE (トレブル)、MIDDLE (ミドル)、BASS (バス)、LEAD 1 DRIVE (リード 1 ドライブ)、LEAD 2 DRIVE MASTER (リード 2 ドライブ・マスター)、PRESENCE (プレゼンス) とDYNAMIC VOICE (ダイナミック・ボイス) があります。

3. モジュレーション: これは、ペダルを踏んだり戻したりする事で、動作をコントロールします。特定のプリセットに変調を掛けます。

TriAxis バージョン 2.0 (続き) :

コンティニュアス・コントロール・ソフトウェア (続き) :

4. コントローラー: MIDIを介して送信される情報の中には“コントロール・ナンバー”があります。MIDIでは 120ものコントロール情報を送受信することができます。情報の中には、変わらないものもあれば、刻一刻変わるものもあります。TriAxisの各パラメーターは、この120ものコントロール・ナンバーのどれにアサインすることもできます。プリセット毎に、1つのパラメーターに1つのコントローラーをアサインします。9つ全てのパラメーターを1つのコントローラーにアサインして、それを1つのペダルでコントロールすることも可能であり、これが最も普通の使い方です。9つのパラメーターをそれぞれ異なるコントロール・ナンバーにアサインして、その数分のペダルを用意することもできます! 大丈夫かって?しかしそんな究極の使い方も可能なのです。ただ、現実的な使い方としては、マスター・コントロール、リード・ドライブ・コントロール、ダイナミック・ボイス・コントロールの3つ位を“リアルタイム”に操作すると言った所でしょうか。シンプルに1つのペダルを使用する方法でも、マニアクに複数のペダル・コントローラーを使用する方法でも...このソフトウェアはどちらでも対応出来ます。殆どのギタリストは、1つか2つのペダルで十分なパフォーマンスを見せています。

ノート: 複数のエクスプレッション・ペダルを複数のコントロール・ナンバーにアサインする場合は、変換機器 (“ポケット・ペダル”等)も複数必要になり、それぞれに適切な設定をしなければなりません。


5. 設定値: ペダル・コントローラーでコントロールするパラメーターを決めてコントロール・ナンバーを設定したら、そのコントロールに何をするかを伝えなければなりません。“設定値”は、正方向あるいは負方向に変化させる量です。“正方向”あるいは“+”の値は、TriAxisに“値が増える”動作をさせます。反対に“負方向”あるいは“-”の値は、TriAxisに“値が減る”動作をさせます。この値の設定は、矢印キーがPROGRAM/CHANNELウィンドウの下にある数値キー ◀ ▶ で行います。

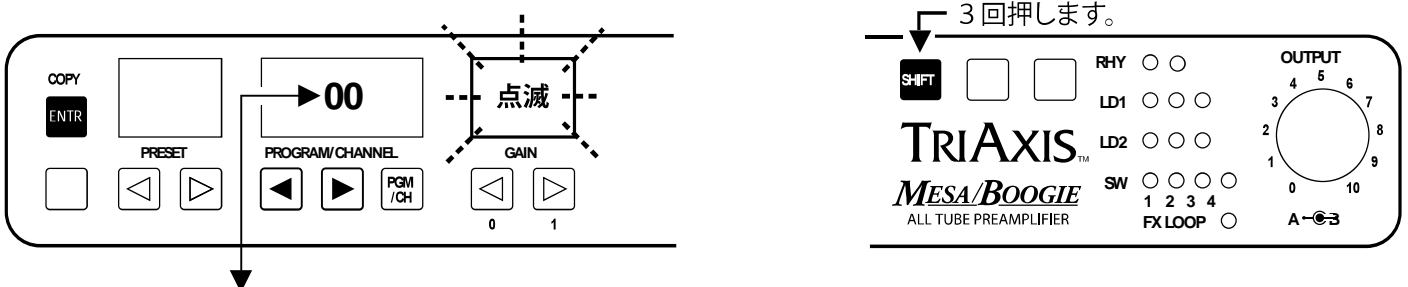
6. サブ・ルーティン: これは、フロント・パネルのキー操作をきっかけにして、“モード”あるいは“ループ”をソフトウェアにより操作するものです。サブ・ルーティンには、“コントローラー/アサイン” サブ・ルーティンと“値” サブ・ルーティンの2つあります。TriAxisには他の機能で使用する、コピー機能や数値キー入力機能等のサブ・ルーティンがありますが、コントロール・チェンジ・プログラミングで使用するサブ・ルーティンは、“コントローラー/アサイン” サブ・ルーティンと“値” サブ・ルーティンだけです。

ここからは“1つずつ段階を経て”プログラムを説明します。それでは実際にプリセットを例にとって説明していきましょう。ここではファクトリー・プリセットを使用して、コントローラー・アサイン・ループの操作を、コントロール・チェンジ・ソフトウェアで行います。

コントローラーのアサイン (サブ・ルーティン) :

ステップ 1.

SHIFTキー  を3回押します。3回目のキー・ストロークで“PROGRAM/CHANNEL”ウィンドウに【0.0】が表示され、“GAIN”パラメーターが点滅します。これでコントローラー・アサイン・サブ・ルーティンに入りました。ここでペダルにアサインするパラメーターを決定します。



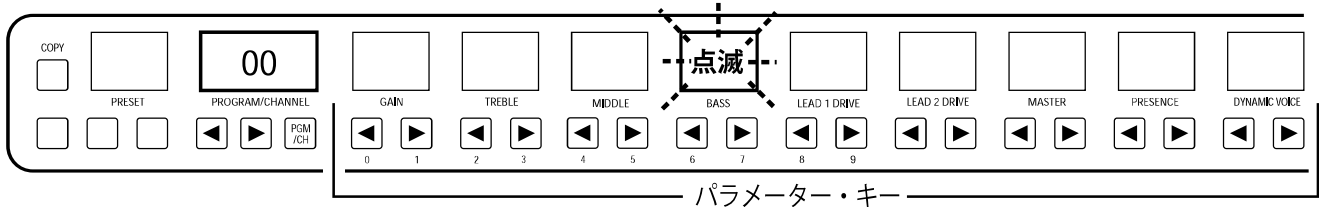
ノート: このディスプレイに表示されている値は、コンティニュアス・コントロール・メッセージを受信していない段階では、普通の状態であり問題はありません。何かメッセージを受信すると... このウィンドウに【0.0】以外の値が表示されるようになります。ここで、望みのコントロール・ナンバーを設定してENTRキー  を1回押すと、そのプリセットに選択したコントローラー・ナンバーが保存されます。

TriAxis バージョン 2.0 (続き) :

コントローラーのアサイン (サブ・ルーティン、続き) :

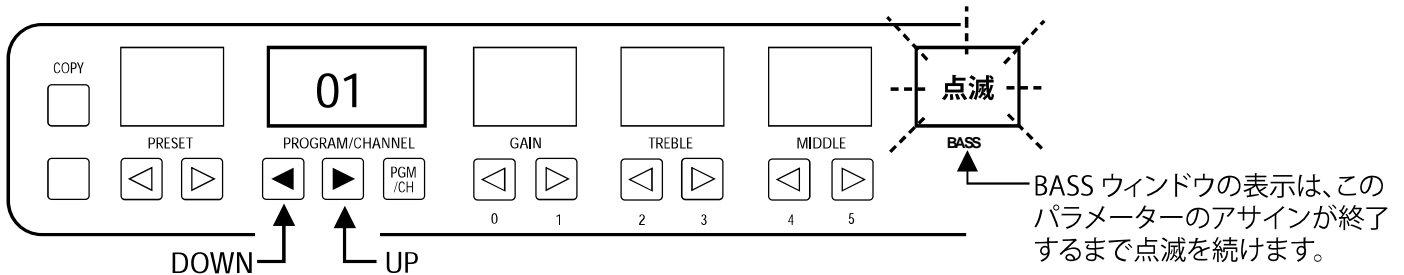
ステップ 2.

パラメーターを選択します。設定したいパラメーターの下にある左右矢印キー ◀ ▶ のどちらかを押します。すると、そのパラメーターのウィンドウが点滅を始めます。この時、新しいユニットはまだ何もプログラムされていないので、全てのパラメーターが00 (PROGRAM/CHANNEL ウィンドウ) に設定されています。



ステップ 3.

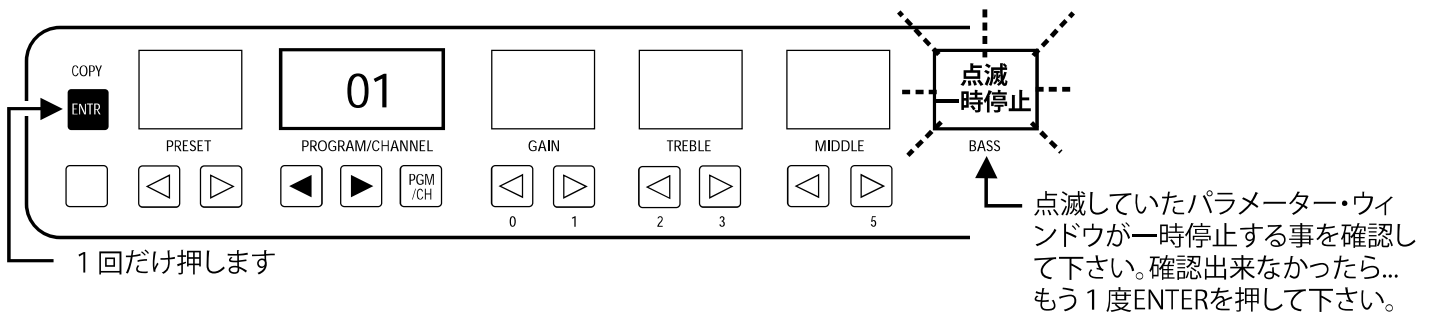
コントローラーを選択します。設定したいコントローラー・ナンバーになるまで右矢印キー ▶ を押します。値が行き過ぎてしまったら、左矢印キー ◀ を押して数値を戻します。



ノート: 点滅しているウィンドウに表示されている値は、コントローラー・ナンバーではなくパラメーターである事を忘れて下さい。コントローラー・ナンバーは、“PROGRAM/CHANNEL”ウィンドウにのみ表示されます。パラメーター・ウィンドウの下にある左右矢印キー ◀ ▶ を操作しても、点滅しているパラメーター・ウィンドウにはコントローラーをアサインする事はできません。

ステップ 4.

ENTRキー **ENTR** を 1 回押します。パラメーターの点滅が終了し、“PROGRAM”ウィンドウに“コントローラー”ナンバーが表示されて、そのプリセットに点滅していたパラメーターがアサインされます。



ステップ 5.

設定したい各パラメーターに、ステップ 2 (この時SHIFT キー **SHIFT** を押す必要はありません) からの手順を繰り返します。各パラメーター/コントローラーのアサインが終了したら、ENTRキー **ENTR** を押します。パラメーター・ウィンドウの点滅が停止して、アサインが完了した事を確認します。各コントローラーが指定したパラメーターにアサインされた事が確認出来たら、“値”のサブ・ルーティンに移ります。


TriAxis バージョン 2.0 (続き) :

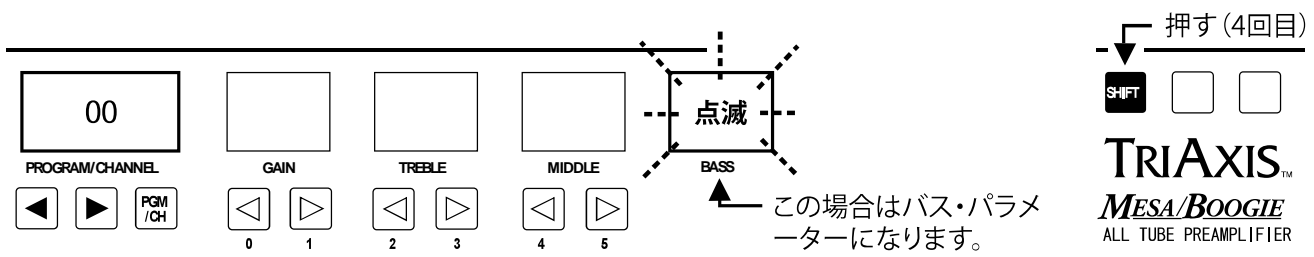
重要ですのでお読み下さい! "値に関するルール" :

1. 変化の値は15あり、それぞれ正方向と負方向があります。
2. プログラム・ウィンドウに"00"と表示されていたら、それは基本プリセットから変化していない事を意味しています。
3. 基本! プリセットが基本になります。ペダルが接続されていなかったり、接続されていても"ペダルの位置がオフ"になっていると、コントロール・チェンジ・メッセージは送信されません。コントロール・チェンジ・サブ・ルーティンでアサインをして、ペダルを接続して操作しない限り、プリセットはそのままです。これが基本プリセットの状態です!
4. パラメーターに値をアサインした瞬間から、基本プリセットに対するモジュレーションが始まり、値が増減します。
5. 正方向 "+" の値は、2桁の数値でプログラム・ウィンドウに表示されます。【00】 → 【15】
6. 負方向 "-" の値は、3桁の数値でプログラム・ウィンドウに表示されます。【00】 → 【115】
この時、3桁目の"1"が負の値であることを示しています。
7. "変化のカウント"は、変化した1つ目の値からであり、基本プリセットの数値そのものはカウントされません。例えば:"ゲイン・コントロール"がプリセットで【6.0】に設定されていた場合、ペダルを踏んでその値を【8.0】まで上げたいとします。この時、値は: 6.5、7.0、7.5、8.0という様に上がっていきます(プリセットの値である6.0はカウントされません)。この時のモジュレーションの値は正方向の"4"になりますので、プログラム・ウィンドウには【04】と表示されます。モジュレーションの値が負方向の"4"であれば、プログラム・ウィンドウには【104】と表示されます。
8. 0.5刻みである事を忘れないで下さい。TriAxisのパラメーター値は、【3.0】から【8.0】の間は、0.5刻みになっています。モジュレーション値を決める時は、この事に注意して下さい。

変化の値 (サブ・ルーティン) :

ステップ 1.

SHIFTキー  を押します。この時、コントロールをアサインする最後のパラメーターは、点滅を続けています。PROGRAM ウィンドウには【00】と表示されています(ユニットがコントロール・チェンジを受信していないからです)。これで、"変化の値 サブ・ルーティン"に入りました。次の値を決定します: 1. 変化の方向 (上"プラス")あるいは(下、"マイナス")そして 2. アサインしたパラメーターにどのくらいのモジュレーションを掛けるのか(何段階のモジュレーションを掛けるのか)を設定します。



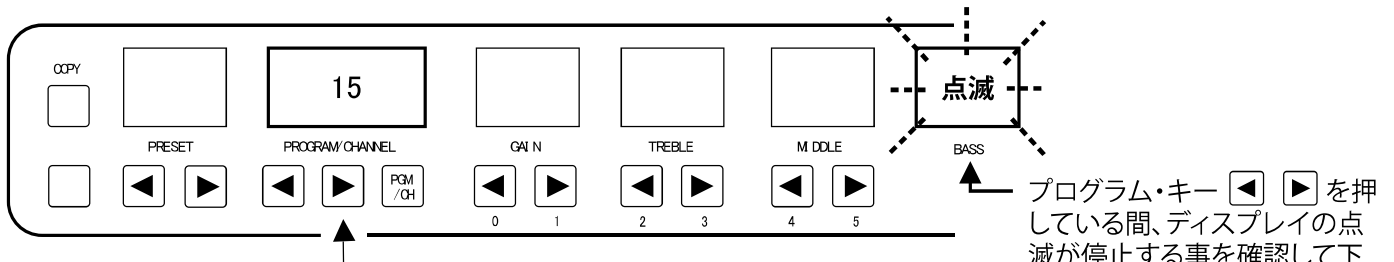
ノート: 値が負の場合は、3桁目に"1"が表示されます。例えば、値がマイナス7の時は、"107"と表示されます。

TriAxis バージョン 2.0 (続き):

変化の値 (サブ・ルーティン、続き):

ステップ 2.

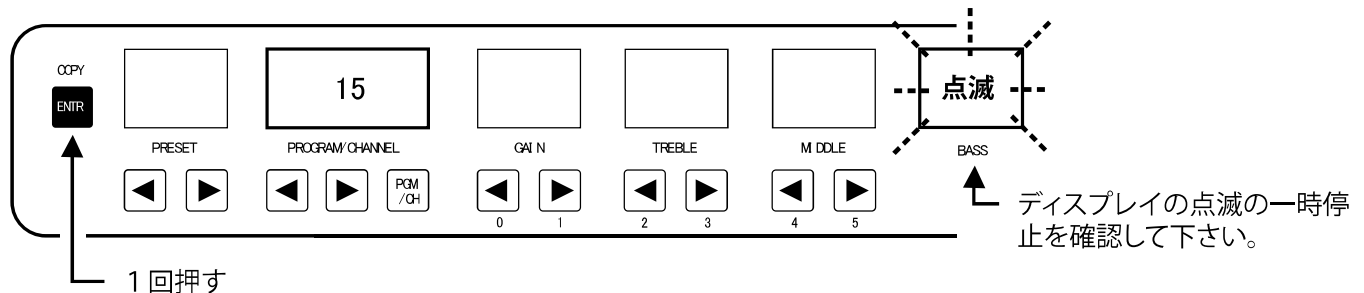
値をアサインします。コントローラーにアサインした最初のパラメーターから始めます。そのパラメーターの下にある、左右矢印キー ◀ ▶ のどちらか 1 つを押します。パラメーターが点滅を始めます! Program/ Channelウィンドウの下にある左右矢印キー ◀ ▶ で、そのパラメーターの最大変化値に設定します。



この例を確認すると、コントロール・ペダルを踏んだ状態で、右矢印キー ▶ を押して正方向の最大変化値に設定した時...その値は 10になりました。

ステップ 3.

ENTRキー [ENTR] を 1 回押します。パラメーターに値をアサインすると点滅が停止し、PROGRAMウィンドウに値が表示されたら、このプリセットへのアサインは完了です。

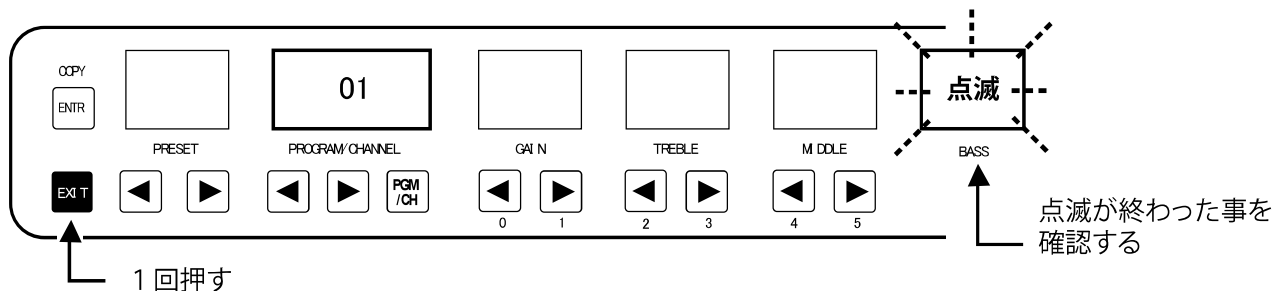


ステップ 4.

繰り返し: SHIFTキー [SHIFT] は押さないで下さい。“値”をアサインする度に、ENTRキー [ENTR] を押してパラメーター・ディスプレイの点滅が一時停止する事を確認して下さい。これは必ず行って下さい!!! 結果的に時間の節約になります。見落としたと思ったら、単純にもう一度ENTRキー [ENTR] を押して下さい。

ステップ 5.

EXITキーを押して通常の“パラメーター・ルーティン”へ戻ります: コントローラー・ナンバーでコントロールしたいパラメーター全ての設定が終わったら、“値”サブ・ルーティンを終了します。EXITキー [EXIT] を押して、通常の“パラメーター・ルーティン”へ戻ります。点滅が終了した事を確認します。それでは実際に、エクスプレッション・ペダルを変換機器に接続して、最初のプリセットのパラメーターにモジュレーションを掛けてみましょう!



ノート: ペダルが通常と反対の動作をしたら、まずはペダルを抜いて、もう一度接続し直して下さい。この時に、変換機器とソフトウェア・インターフェースのキャリブレーションが再度行われます。

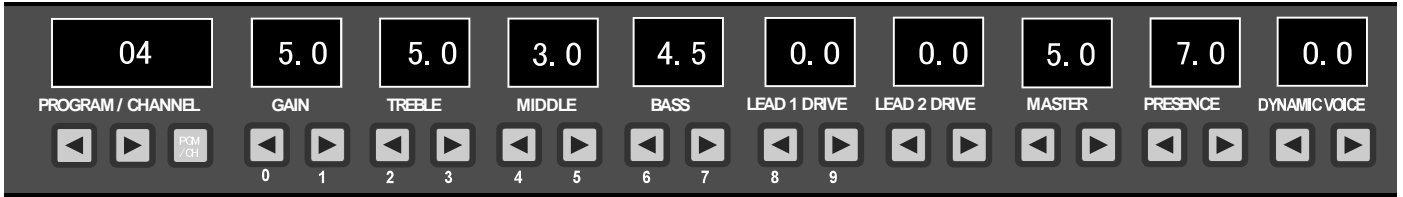
TriAxis バージョン 2.0 (続き) :

コントロール・チェンジ・デモ :

いかがですか! ディスプレイを見ると、数値が変わっているのが解ると思います。まだ信じられないかも知れませんが、これは現実です...さあ続けましょう。始めに...このセクションを注意深く全て読んで下さい。

次に...コントロール・チェンジ・ソフトウェアの例を挙げてあります。ファクトリー・プリセットの04 を基本プリセットとして、弾けるようなクリーン・サウンドにモジュレーションをかけて、ロー・ワットエージのクランク・ビンテージ・サウンドを生み出します。次の10ステップの手順をふんで、パラメーターのアサインを行います:

モジュレーションの前 ペダルが戻った状態

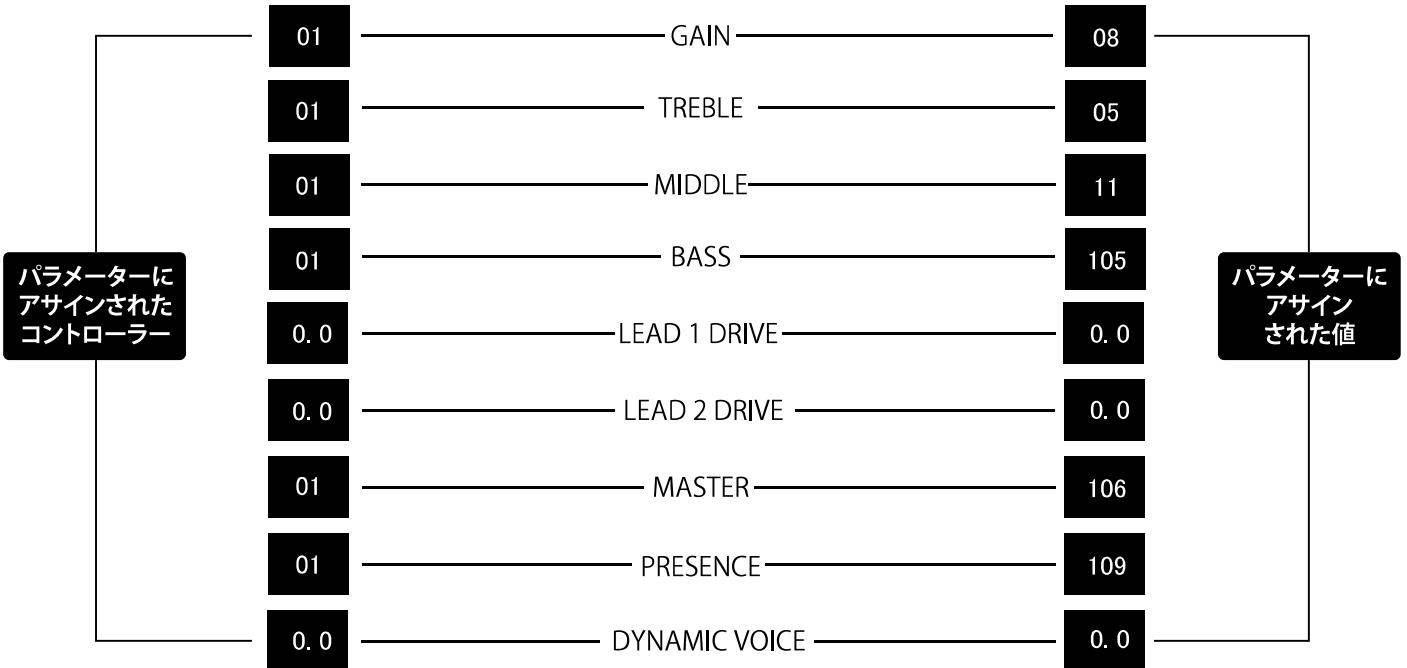


コントローラーのアサイン

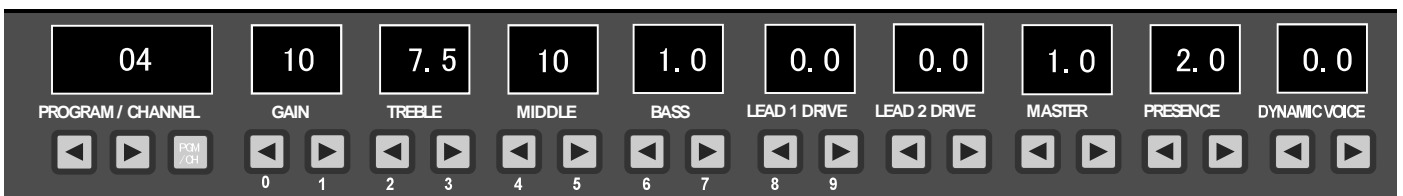
パラメーター・ウィンドウにコントローラー01をアサインする

値のアサイン

各パラメーターに次の値をアサインする



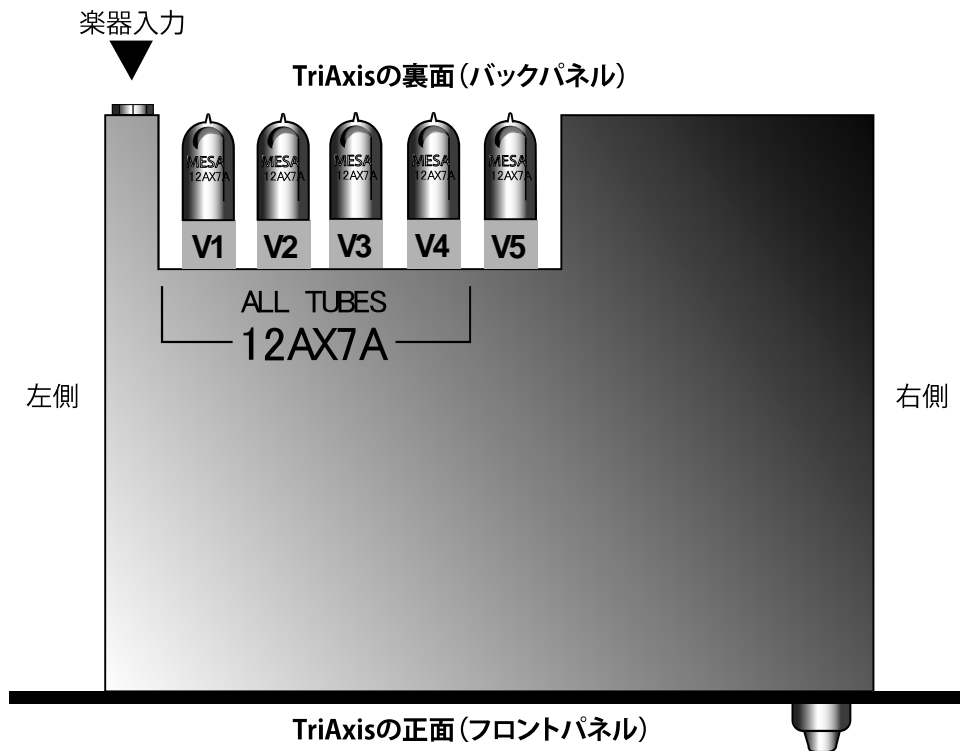
モジュレーションがフルに掛かった後 ペダルを踏み込んだ状態



上のクリーン・サウンド(ファクトリー・プリセット04) にモジュレーションを掛けた後

ノート: 電源を切って...もう一度電源を入れると、今設定したコントローラー・チェンジ・アサインは消えてしまいます。

仕様 / 真空管機能表:



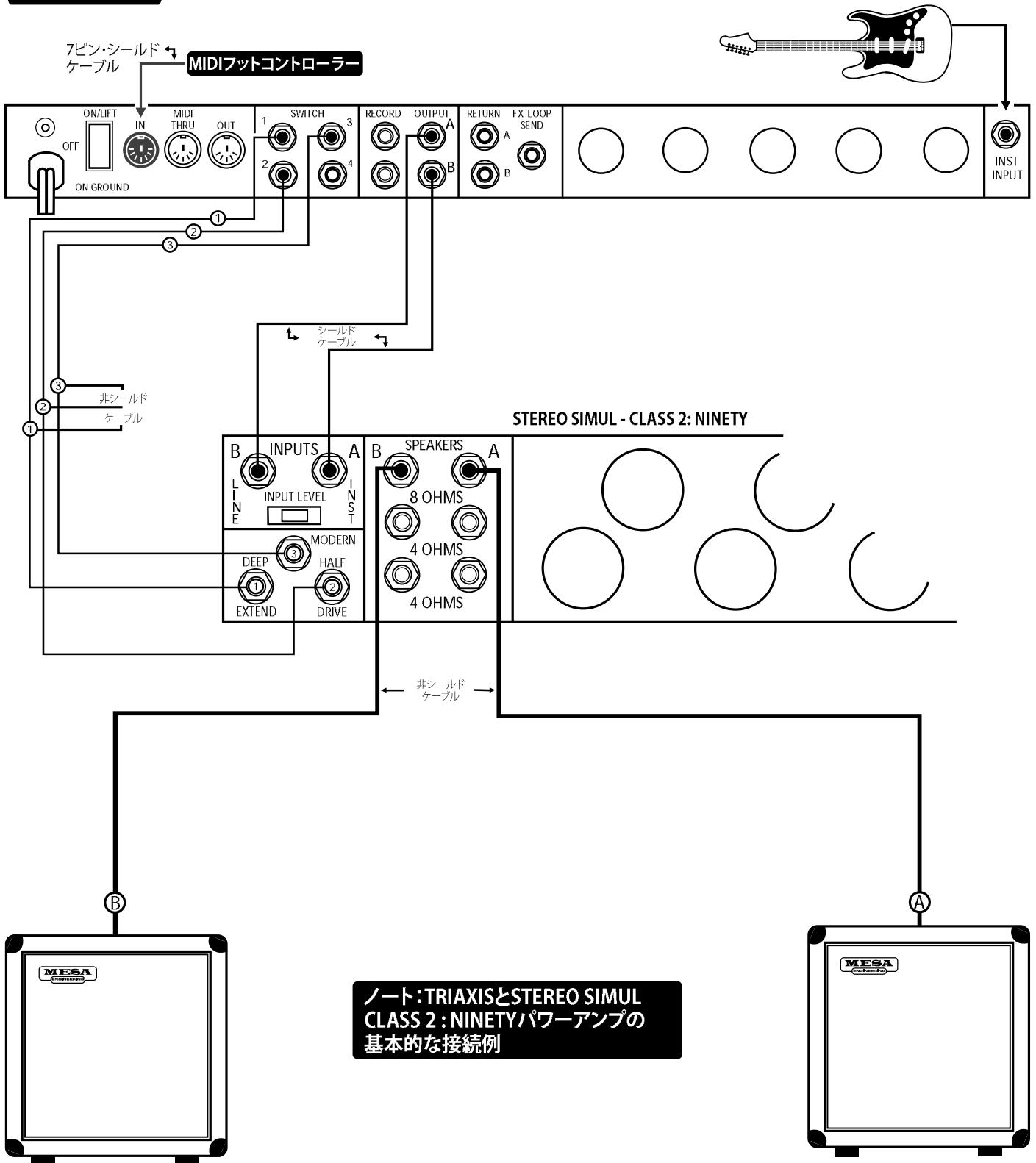
真空管機能表

- V1 = LEAD 1 入力
- V2 = LEAD 1 以外の入力
- V3 = LEADとRHYTHMミックス
- V4 = LEAD 2
- V5 = エフェクト・リターン

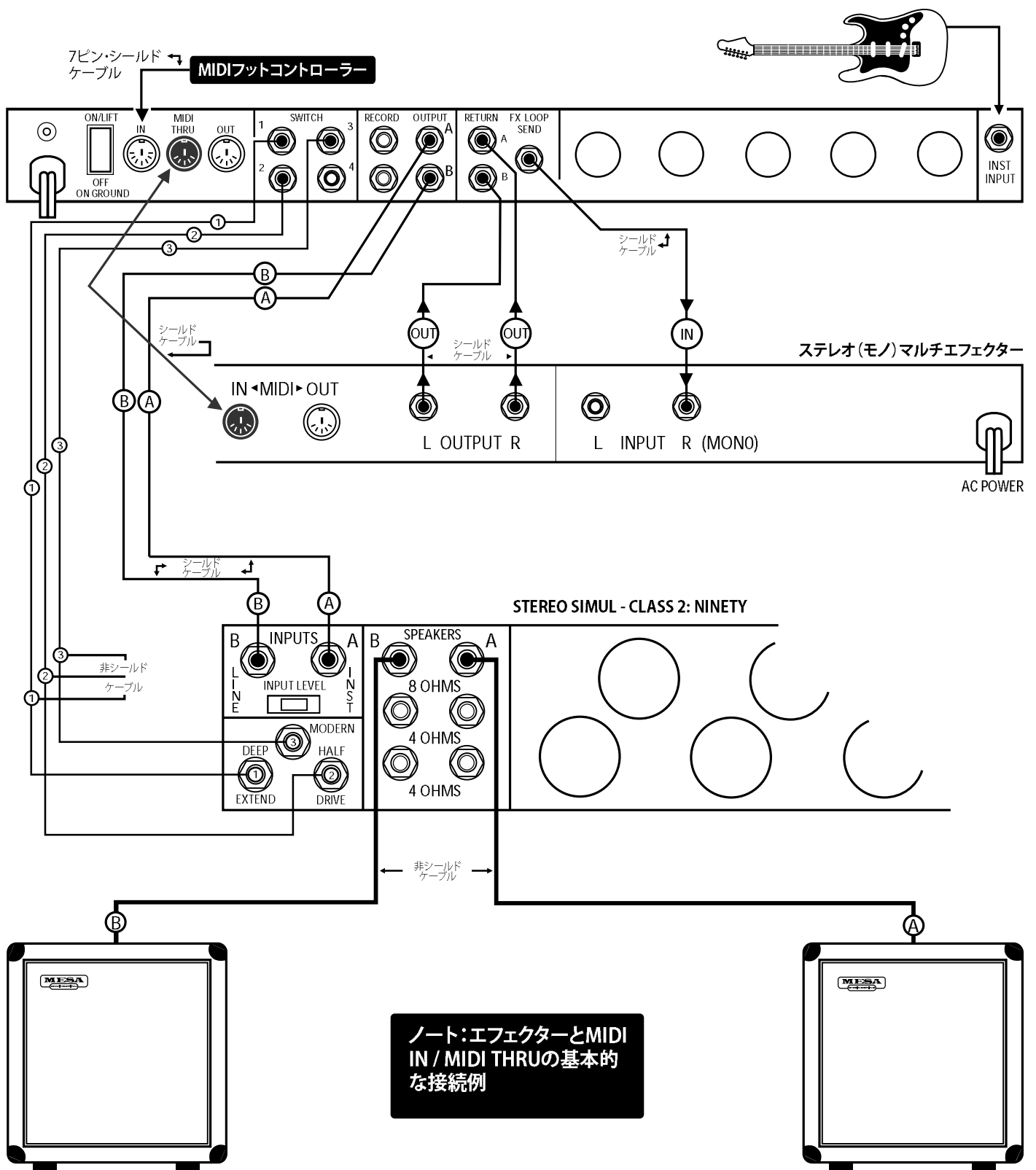
寸法・仕様

- 重量: 約4.3kg
- 高さ: 1U (4.445cm)
- 奥行き: 約36.3cm
- 入力インピーダンス: 1Mega Ω
- 出力インピーダンス: 25k Ω (出力レベルを最大の状態)
- 消費電力: 30W

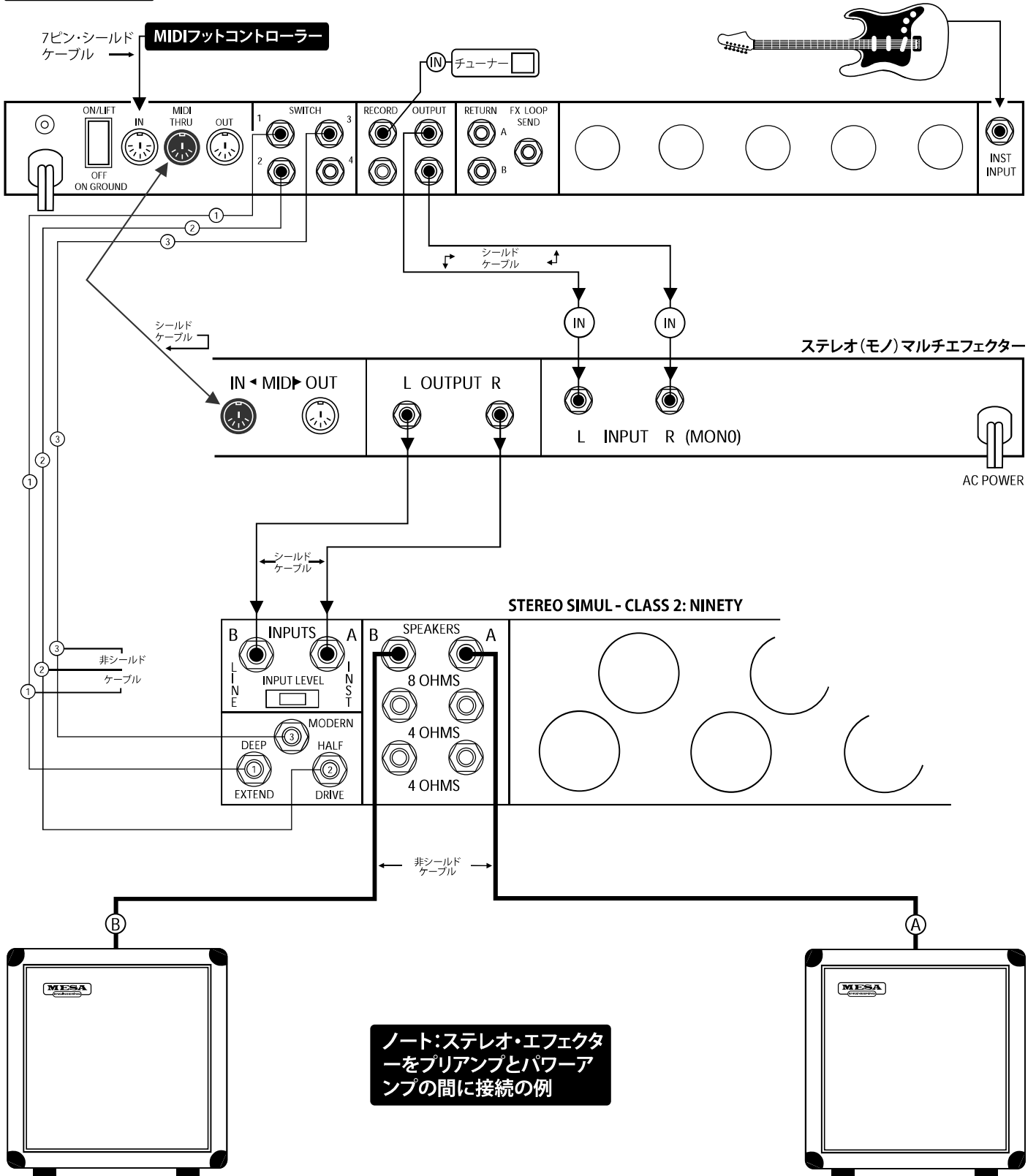
接続例 #1:



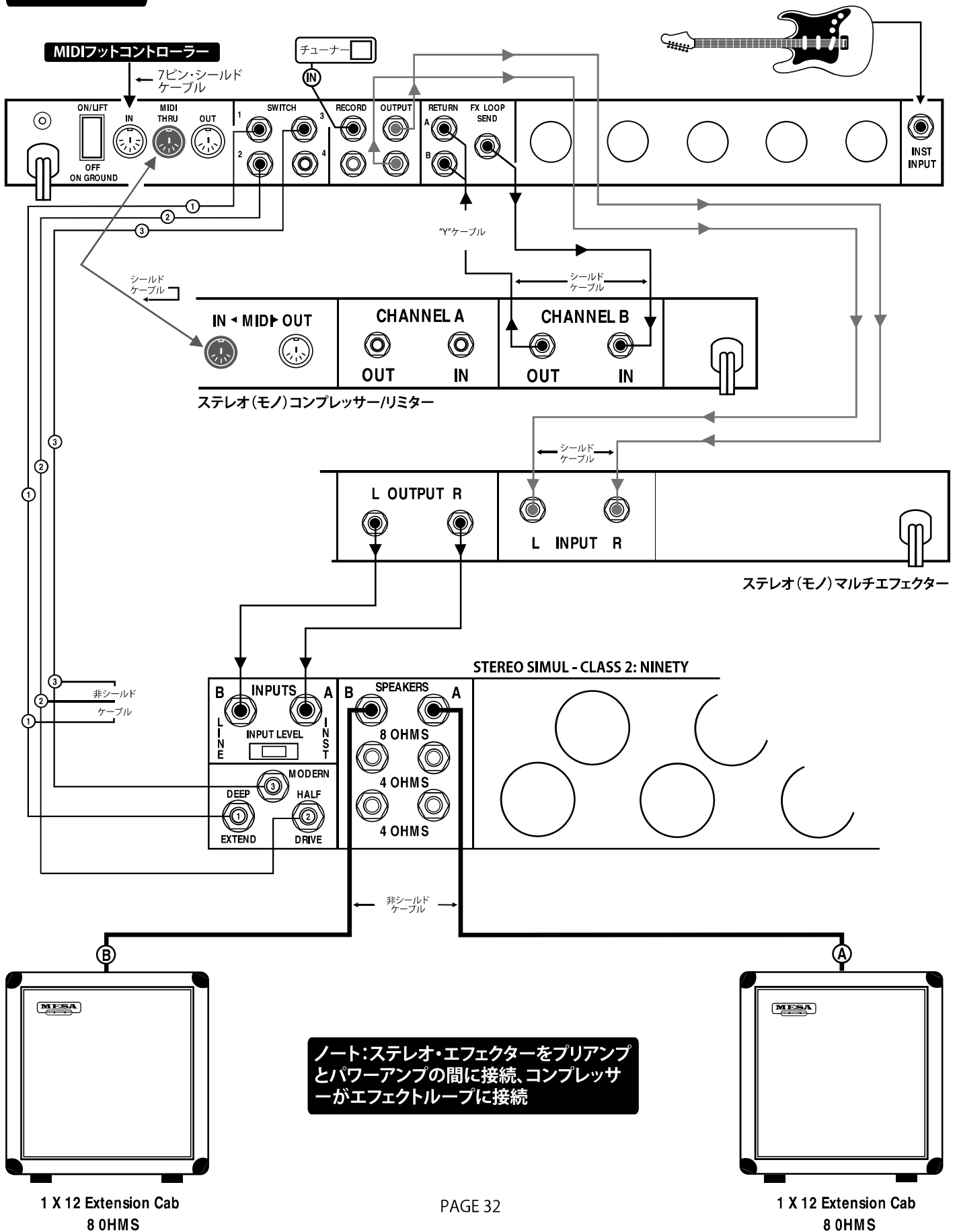
接続例 #2:



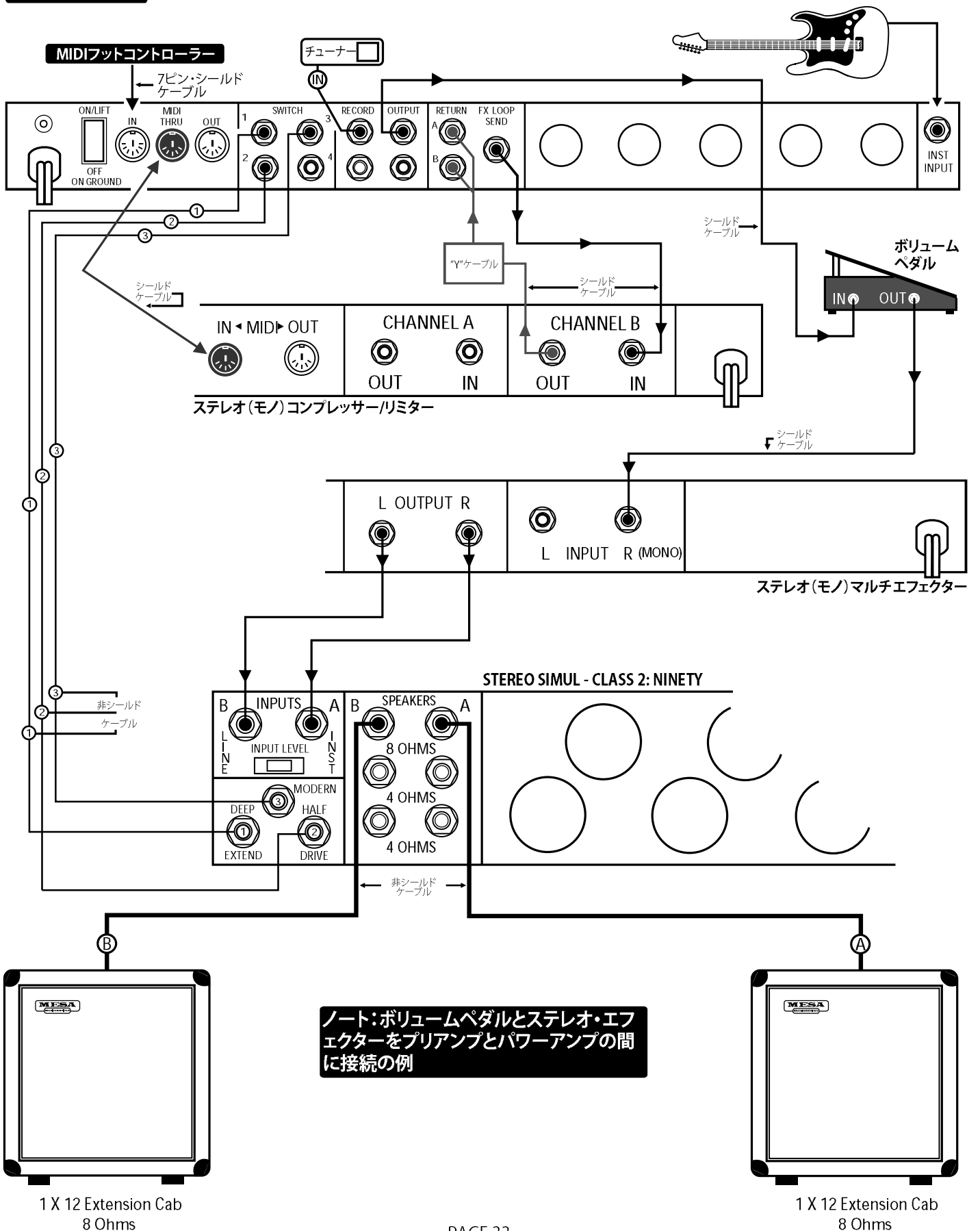
接続例 #3:



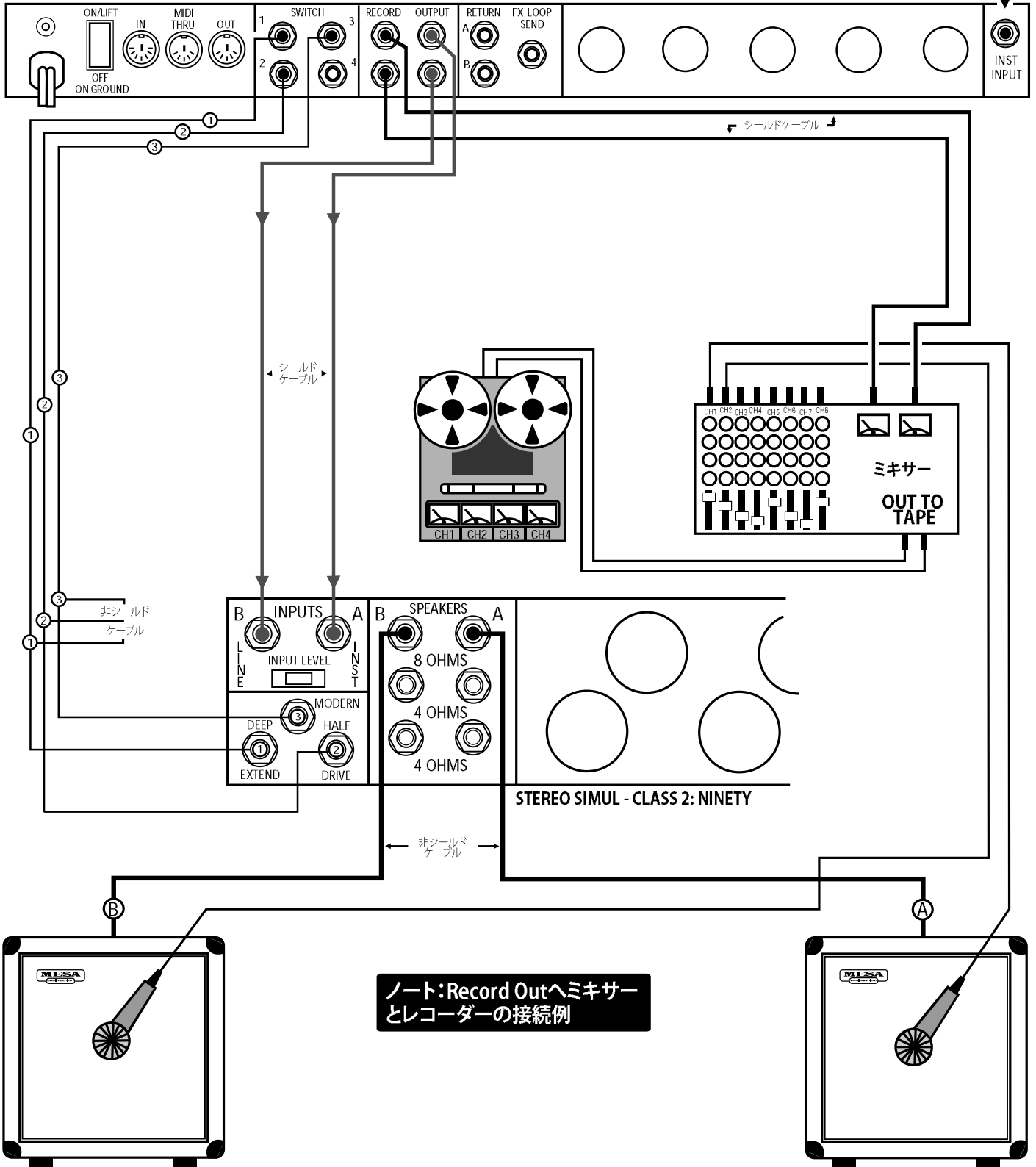
接続例 #4:



接続例 #5:



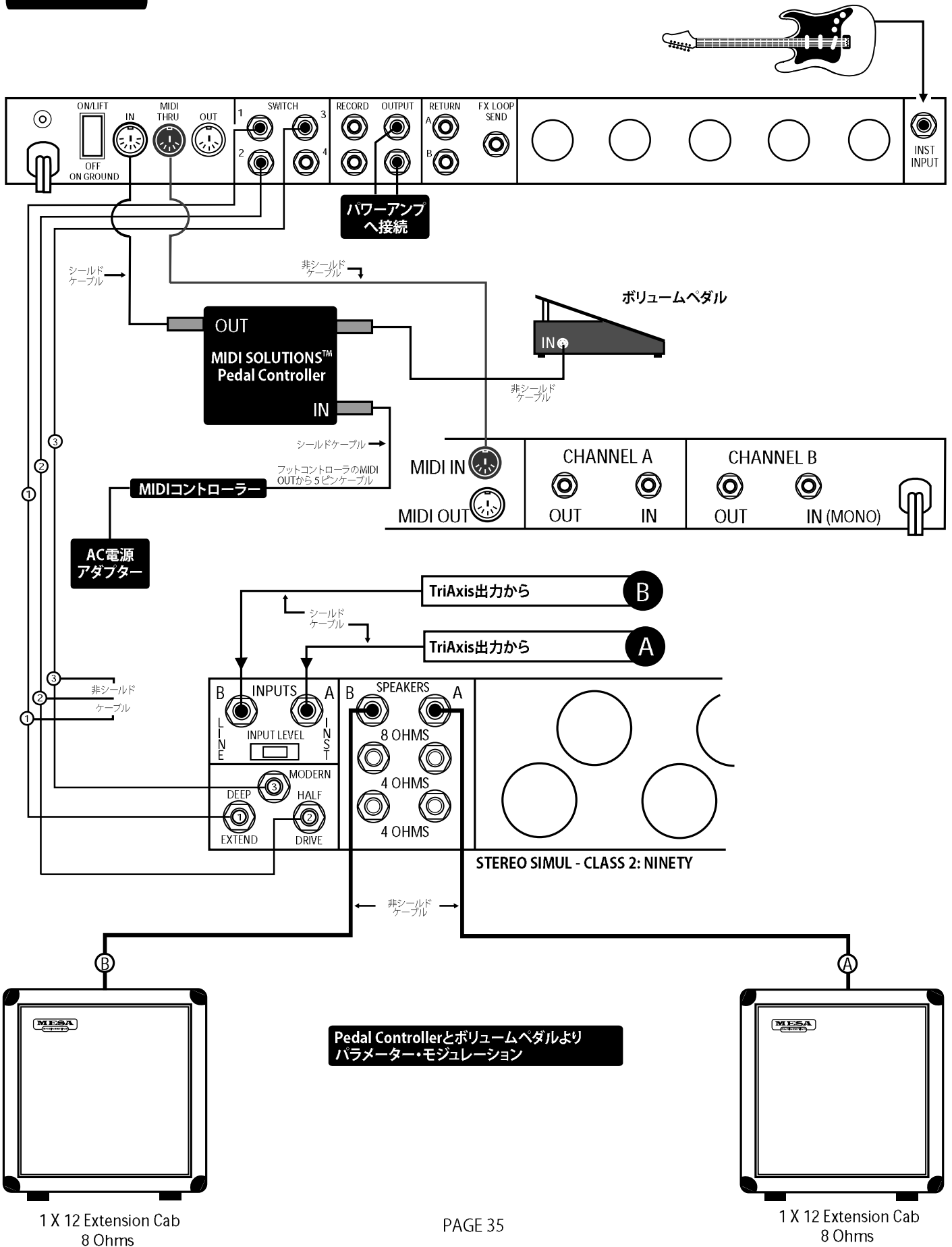
接続例 #6:



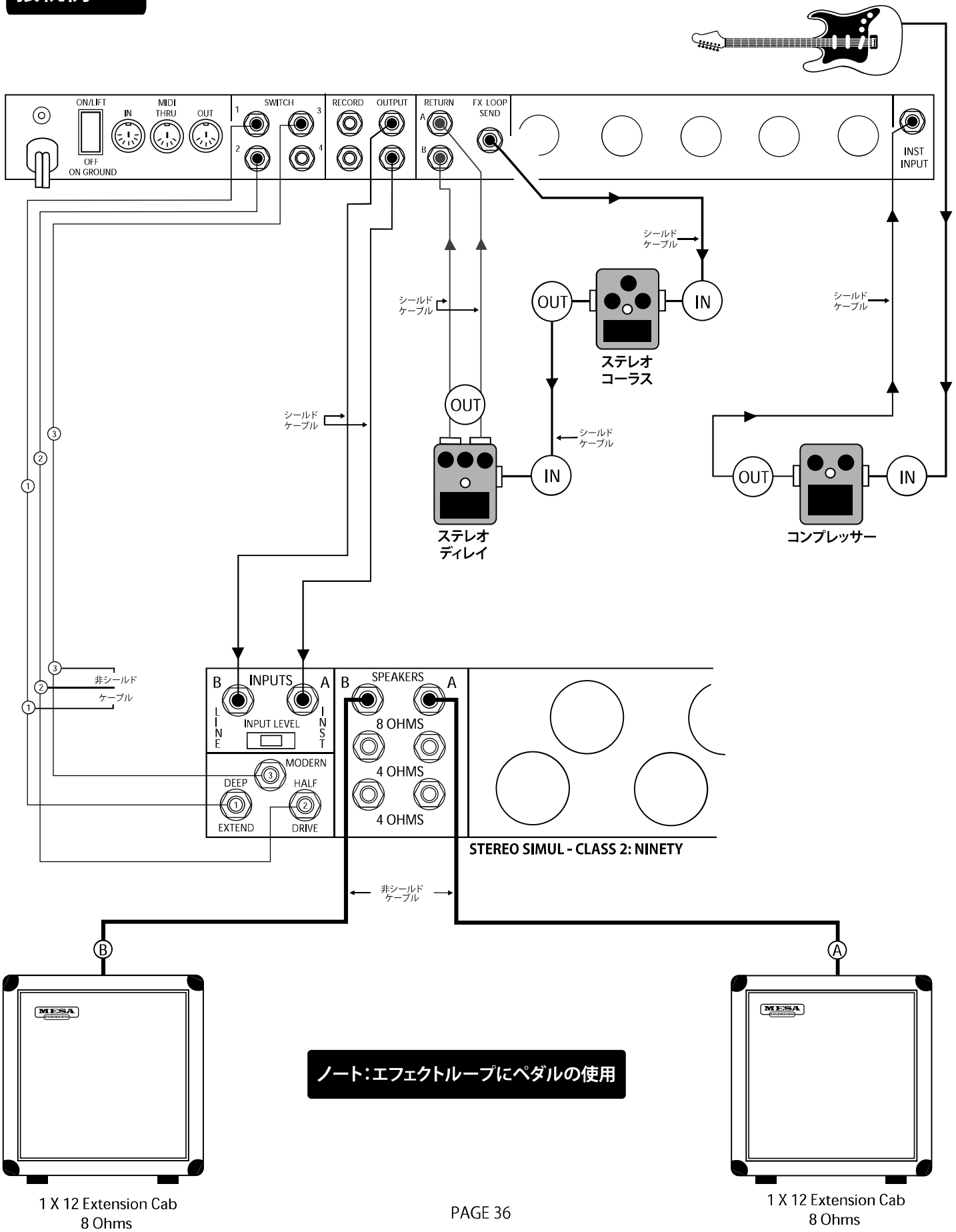
1 X 12 Extension Cab
8 Ohms

1 X 12 Extension Cab
8 Ohms

接続例 #7:



接続例 #8:



ノート:エフェクトループにペダルの使用

1 X 12 Extension Cab
8 Ohms

1 X 12 Extension Cab
8 Ohms

出荷時の初期設定 (プリセット 1 ~ 5):

出荷時の初期設定 01 Dual Rectifier Crunch / Solo Sound **モード:** Lead 1 赤 **ピックアップ:** ブリッジ・ハムバッカー

01	6.0	5.0	7.0	7.0	6.0	0.0	5.0	5.0	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 02 Mk II - C High Gain Lead **モード:** Lead 2 黄 **ピックアップ:** ブリッジ・ハムバッカー

02	7.5	5.0	4.0	5.0	0.0	6.5	4.5	3.5	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 03 High Gain Fat Mk I Lead **モード:** Lead 1 黄 **ピックアップ:** ブリッジ・ハムバッカー又はシングルコイル・ネック

03	8.0	7.0	3.0	4.0	7.0	0.0	4.5	3.5	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 04 Sweet-Warm Vintage Mk I Clean **モード:** Rhy 緑 **ピックアップ:** シングルコイル・ネック又はシングルコイル x 3

04	5.0	5.0	3.0	4.5	0.0	0.0	5.5	7.0	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 05 Tight-Bright Mk IV Clean **モード:** Rhy 黄 **ピックアップ:** シングルコイル・ネック又はシングルコイル x 3

05	4.0	5.0	3.0	4.5	0.0	0.0	6.5	6.0	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 (プリセット 6 ~ 10):

出荷時の初期設定 06 Vintage Amp Cranked

モード: Rhy 緑

ピックアップ: ネック・ピックアップ

06	10	9.0		1.0				4.5	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 07 Bluesy Mk 1 Lead

モード: Lead 1 緑

ピックアップ: ネック・ハムバッカー又はシングルコイル・ネック

07	8.0	6.0	4.0	3.0	4.5	0.0	5.0	3.0	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 08 Howling Blues Mk IV Lead

モード: Lead 2 緑

ピックアップ: シングルコイル・ネック又はネック・ハムバッカー

08	7.0	5.0	5.0	4.5	0.0	3.0	4.5	2.0	0.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 09 Crazy Mk II - C Crunch

モード: Lead 2 黄

ピックアップ: ブリッジ・ハムバッカー

09	8.0	5.5	4.0	3.5	0.0	6.5	4.0	4.0	6.0
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

出荷時の初期設定 10 Searing Mk IV Crunch

モード: Lead 2 赤

ピックアップ: ブリッジ・ハムバッカー

10	8.0	5.0	4.0	4.5	0.0	6.5	4.0	4.0	3.5
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定テンプレート:

ユーザ設定 01

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 02

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 03

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 04

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 05

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定テンプレート:

ユーザ設定 06

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 07

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 08

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 09

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 10

モード:

ピックアップ:

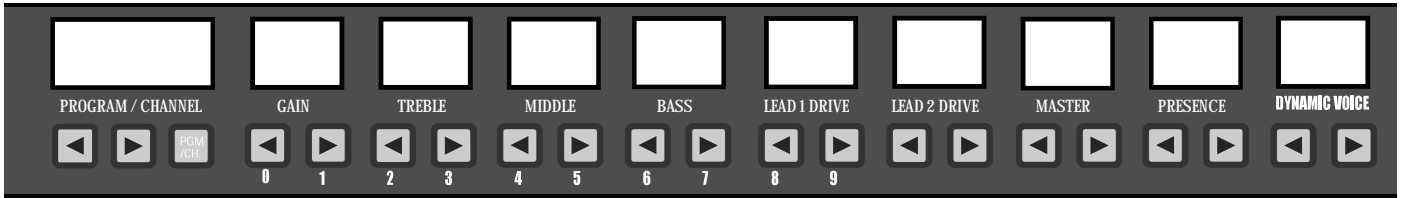
PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM / CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定テンプレート:

ユーザ設定 11

モード:

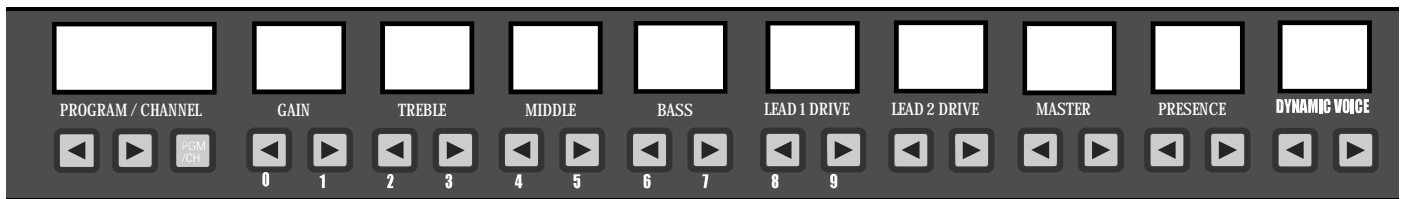
ピックアップ:



ユーザ設定 12

モード:

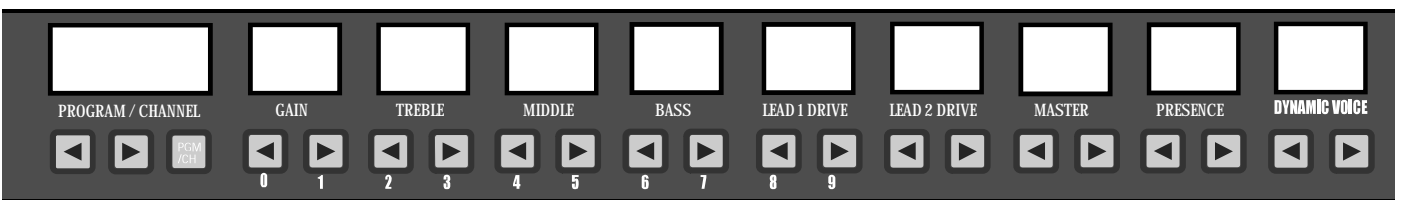
ピックアップ:



ユーザ設定 13

モード:

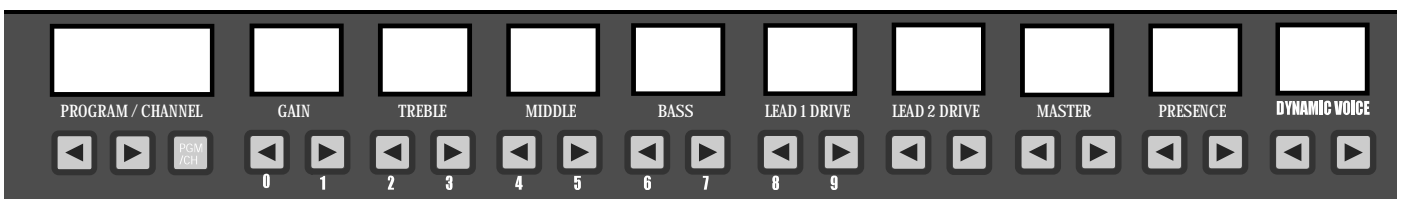
ピックアップ:



ユーザ設定 14

モード:

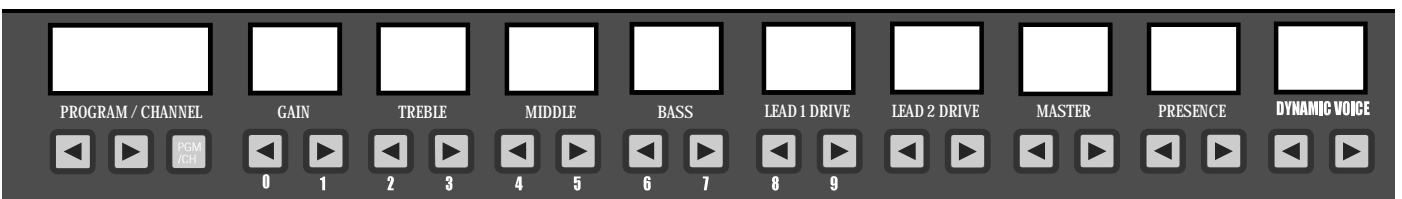
ピックアップ:



ユーザ設定 15

モード:

ピックアップ:



ユーザ設定テンプレート:

ユーザ設定 16

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM/CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 17

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM/CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 18

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM/CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

ユーザ設定 19

モード:

ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM/CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

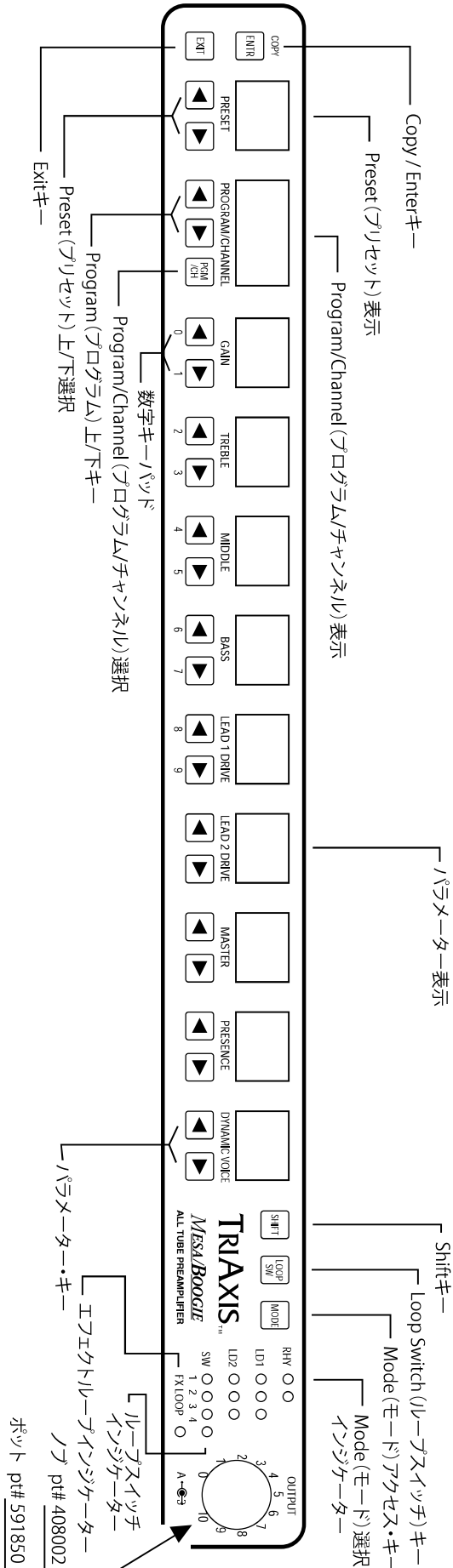
ユーザ設定 20

モード:

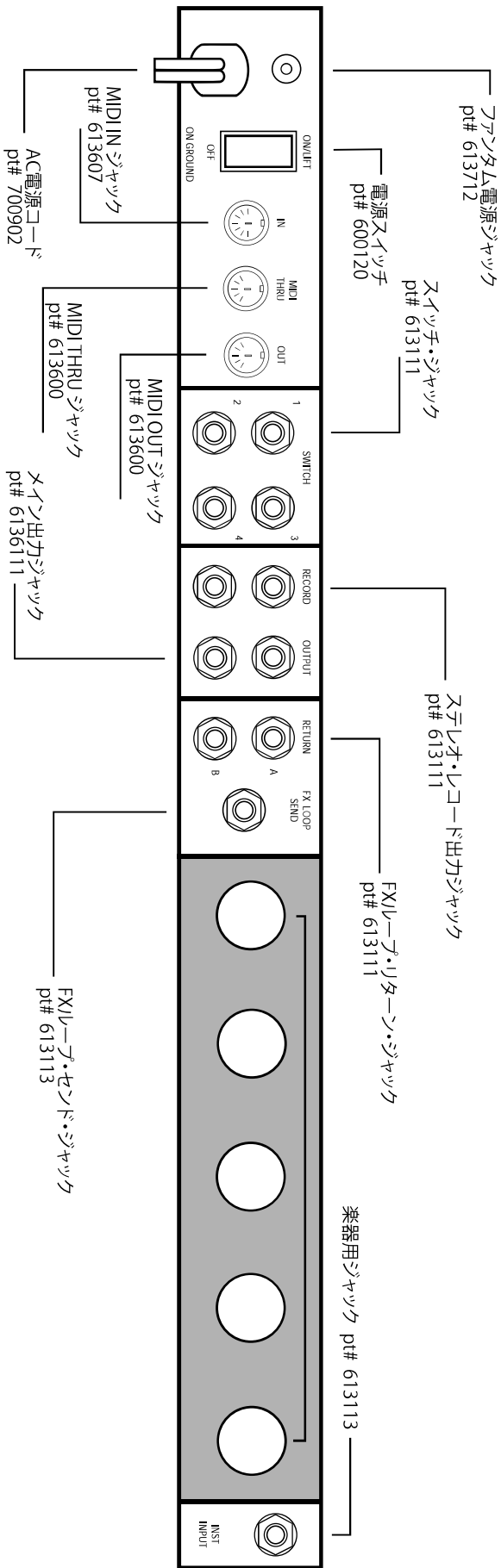
ピックアップ:

PROGRAM / CHANNEL	GAIN	TREBLE	MIDDLE	BASS	LEAD 1 DRIVE	LEAD 2 DRIVE	MASTER	PRESENCE	DYNAMIC VOICE
◀ ▶ PGM/CH	◀ ▶ 0 1	◀ ▶ 2 3	◀ ▶ 4 5	◀ ▶ 6 7	◀ ▶ 8 9	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶	◀ ▶

TriAxis フロントパネル



TriAxis バックパネル



The Spirit of Art in Technology



ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社

Email: service.japan@gibson.com

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）